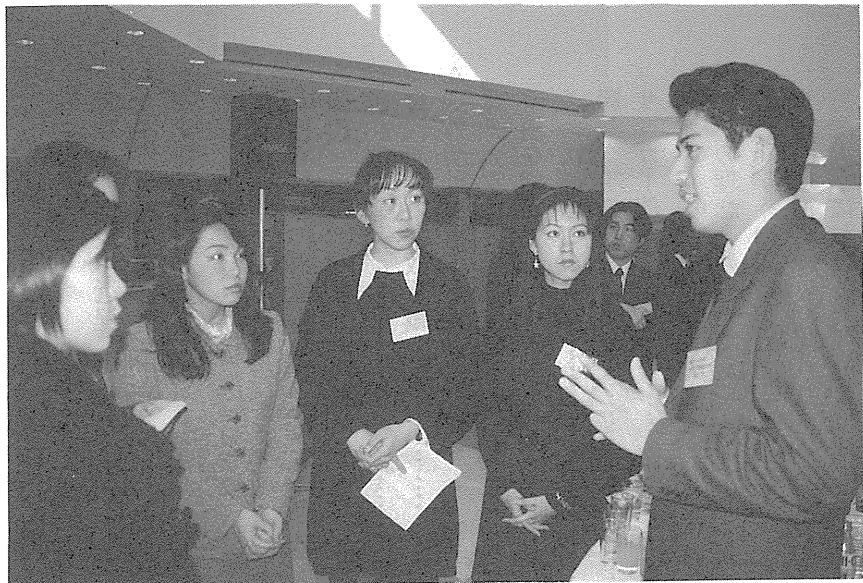


麗澤教育 第二号 目次

| | |
|-------------------|----|
| 写真・麗澤大学近況 | 2 |
| △女子学生への提言▽ | |
| まず経済的自立から | 6 |
| 女子教育雑感 | 10 |
| 異文化体験による自己発見を | 15 |
| 女性らしさ、男性らしさ、自分らしさ | 20 |
| △論説▽ | |
| 調和と創造 | 26 |
| 現代若者の宗教意識 | 29 |
| △課外活動レポート▽ | |
| 麗澤大学に芸術の香を | 40 |
| 茶道を学んで | 43 |
| テニス部のこと | 48 |
| 麗澤空手の伝統 | 55 |
| サッカー部の夢 | 59 |
| スポーツを通じて学んだこと | 64 |
| △建学の理念をめぐって▽ | |
| 道徳科学への想い | 68 |
| 慣習的道徳について思うこと | 72 |
| 麗澤大学における人間教育 | 77 |

| | |
|-------|----|
| 大橋 照枝 | 2 |
| 岩見 照代 | 6 |
| 花枝美恵子 | 10 |
| 町 惠理子 | 15 |
| 小田川方子 | 20 |
| 保坂 俊司 | 26 |
| 水野 淳子 | 29 |
| 熊谷和佳子 | 40 |
| 下田 健人 | 43 |
| 富田 裕之 | 48 |
| 北川 靖 | 55 |
| 石井 貴 | 59 |
| 玉井 哲 | 64 |
| 岩佐 信道 | 68 |
| 黒川 洋 | 72 |
| | 77 |



就職部主催の卒業生との懇親会、先輩の話に聞きいる学生たち。



フレッシュマン・キャンプの懇親会風景。
グループの出し物を披露。



大学院開設記念祝賀会における邦楽同好会
の学生による琴の演奏。



台湾・淡江大と学術交流15周年 スポーツ・文化交流で
淡江大・林学長から歓迎を受ける学生たち。



廣池学園の関係者が集う野外昼食会。



べったんこ。
恒例の国際交流もちつき大会。



学長とともに、つきたてのお餅をいただきます。



本番前の大学祭実行委員会 会議風景



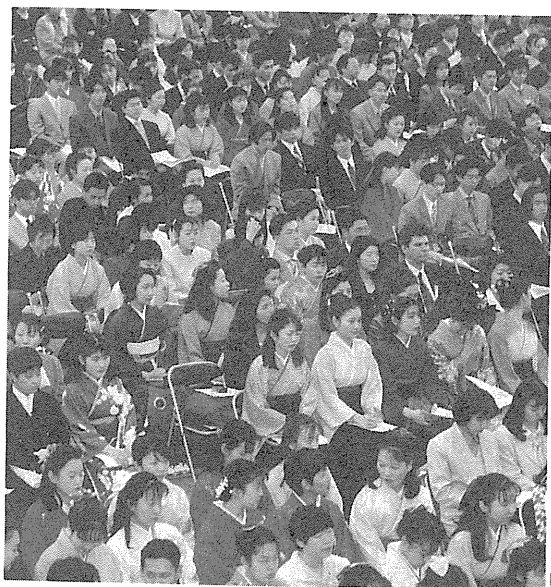
アートクラブ展示「image-広池ちくろう」



平成8年度 入学式



廣池学長



平成7年度 卒業式



卒業生代表
国際経済学部 木下恵美さん。

まず経済的自立から

—二十一世紀の女性像—

★少子化に無策の行政

先日テレビで、東京都豊島区が、保育所を三カ所ほど閉鎖すると発表したため、子供を預けているお母さん達が、子連れで保育所閉鎖反対運動をしている様子が報道されていた。

ここに日本の女性や子供に対する行政の欠陥の縮図があるように思われた。この少子化で（日本の合計特殊出生率は、九五年で一・四三と過去最低になっている）、子供を生み育てることへの両親の経済的、時間的負担を少しでも軽くしていく施策をとらないと、日本は、超高齢化、高負担社会で二十一世紀には国の存続が危ないとされている折も折、なせ子育てを支援する

国際経済学部教授 大橋 照枝

のに不可欠な保育所閉鎖をするのか。もちろん財政難のためだが、予算をカットするならば、もっと行政の無駄使いの多い面が他にあるはずだ。

親の育児を支援する保育所のカットなどは財政削減の最後の最後に行うことであるはずだ。また、子育ては母親だけでなく、父親にも責任があり、また次世代を育てることは社会全体の責任でもあり、行政の役割も大きい。

ところが、保育所閉鎖反対のデモでは、子連れのお母さんたちだけで訴えており、父親の影も形も見えない。また保育所カットをコメントしている豊島区の男性職員は、少子化対策のために、育児の社会的重要性

がどれだけあるかについて、全く理解するセンスを欠いた非人間的風貌にすら見えた。

★女性が外に出て働くことを前提にした施策を

日本社会は、女性が参政権を獲得してから五〇年にもなるというのに、九六年秋の衆議院選挙で当選した女性は二三人で、衆議院の女性比率は四・六%と、世界の議会の一二〇位、もちろん先進国中最低というレベルだ。

北欧のスウェーデンやフィンランドは、日本より二五年（スウェーデン）から四〇年（フィンランド）早く女性が選挙権をとっていることもあるが、国会議員の四割が女性、大臣の四割が女性で、外務大臣、大蔵大臣、国防大臣が女性であることも珍しくない。このような議会への女性進出の活発さが、北欧社会の男女平等、福祉政策が世界で最も進んだ理由でもあった。

しかし、北欧の女性議員の活躍もさることながら、北欧の女性政策が進んだ理由、そして日本と根本的に違うのは、北欧では女性が選挙権をとった二〇世紀始

めごろから、女性が労働力として期待され、女性は社会に出て働き経済的に自立する存在であることを前提に、女性政策・社会政策が打ち出されていったこと。また女性達が、女性サイドに立って、女性が働くことを前提に子育てや介護を社会がサポートする政策を提言していったことだ。日本は、女性が政治に進出して五〇年もたっても、女性は夫に扶養され、その代り、家事・育児・介護を無償で女性が行うことを前提にして、社会政策・年金や税金の制度ができています。

子育て後、主婦がパートタイマーで就業すると、その年収が一〇三万円以下であれば、夫の所得の配偶者控除が受けられる。また専業主婦は、一銭も年金を納めなくても、夫の死後遺族年金がもらえる。

パートの年収一〇三万円で自立できるわけではない。女性を経済的に自立させないようにして、家事・育児・介護を無償で行わせるようにしているという見方もできる。

一見、社会のコストを低下させ、経済効率を高めているようにみえる。確かに、日本が経済大国となった

のも、昼夜を問わず死ぬほど働く企業戦士の夫と、家事・育児・介護に二四時間年中無休無償で従事する妻という二極分化した役割分業が、高度経済成長時代を通して貫かれてきたせいでもある。

しかし、社会が成熟し経済の低成長時代の今日、そして二十一世紀の高負担社会を目前にして、女性を低収入の主婦として、税を免除したり、年金を納めない主婦に一〇〇%の遺族年金という政策は、財政的にも成り立たなくなる。

★大学でよき職業人としての訓練を

外に出て働くことは、憲法二七条にも保障された基本的権利であり、恋人や妻や母親が働きたいというのを、パートナーたる、男性が拒否することは憲法違反となる。

社会学者の尾高邦雄は、働く意味は、「生計の維持」(経済的自立)と「個性の發揮」(自己実現)、「連帯の実現」(社会の一員としての役割を果す)(カッコ内は大橋の表現)と述べている。

フェミニストの祖、メアリ・ウルストンクラフトは二〇五年も前に、著書『女性の権利の擁護』の中で、「女性は夫が生きているあいだ生計を夫の恵みに頼ってはいけないし、夫の死後もその財産で支えられてはならない」「男女であれ女性同志であれ、自立してない人間の間には、好ましい関係は生まれえない。女性は夫に頼って生きてはならない。女性は夫が存命中も死後も、その財産で生活してはならない」と述べている。

女性が、主体的に生きるためには、経済的自立が不可欠であるし、そのためには、女性は夫のあるなしにかかわらず、外に出て働くことが前提になる。

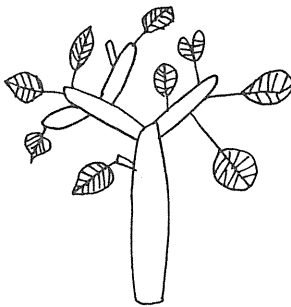
折しも二十一世紀の日本は、若年労働力不足で、女性の労働力化が不可欠になる。パート労働といった、夫の収入に依存しないと自立もできないような働き方でなく、フルタイムとして働いて、税金も社会保障料も一人前に支払い、国の税収や財政のパイを大きくし、その見返りとして、有給の育児休業(スウェーデンでは育児休業中八割の給料が支払われるが日本は無

給)、十分な児童手当(日本では親の年収制限があり、一ヶ月五〇〇〇円程度で三歳で打ち切り。スウェーデンでは子供が一六歳になるまで、家計収入の四分の一から三分の一にもなるほど半端でない金額が支払われ、国公立の高校、大学の授業料は無料)を支払わせるよう国の政策転換を計っていかねばならない。

もはや結婚は女性を経済的に保障する永久就職でもないし、女性の経済的自立のないところに、幸せなど

はありえない。

幸いにして、麗澤大学は、国際経済学部も男女の学生数が、学年によっても異なるが相半ばしているクラスもある。女子学生も、男子に依存せず、生き生きと主体的に勉学に、部活に励んでいることは心強い。よき職業人としての訓練を在学中にしっかり身につけるため、女子学生諸氏のさらなる奮起を期待したい。



女子教育雑感

外国語学部教授 岩見照代

現在、四年生大学に女子が進学するのに、なにか抵抗を覚える人がいるだろうか。現在、学園で学んでいる女子学生の中で、進学希望を親に話したときに、「女は大学なんかに行かなくていい」といわれた人がいる

を上回っている。いったい女子が大学で学ぶことが、いつから「当たり前」のようになってきたのだろうか。女性のおかれていた状態を、少し振り返ってみよう。

だろうか。私の場合、地方の進学校といわれる公立の高校に進学した時点で、女子は男子の三分の一、その中で四年生の男女共学の大学に進学するものは半数以下の状態であった。私自身のささやかな経験を振り返ってみても、女子が勉強を続けることに抵抗を示すといった風潮自体は、さすがに弱まっていったものの、「女のくせに」といった眼差しはどこかで感じ続けてきたように思う。麗澤大学では、女子学生数が男子学生数

一九四五年八月一五日、敗戦を境に、アメリカ占領軍の手によって急速にすすめられた一連の諸改革がある。まず、一八九〇年に公布された「集会及政社法」以降、これまで奪われていた女性の政治活動の自由を全面的にとり戻し、一九四七年三月三十一日に公布された「教育基本法」によって、教育上の男女平等、男女共学が明記される。男女同一労働同一賃金の原則が確立された「労働基準法」が公布されたのが同年四月七日。そして民法改正（十二月二十七日）によって、

法的には家族制度が廃止され、ようやく妻も夫と同等の地位を得ることになった。円地文子の『女坂』に描かれたような、妻が夫の妾探しをしたり、妻妾同居が「異様」な状態だと考えられるようになったのは、ただかここ半世紀にも満たないのである。

女性の地位向上については、なかでも女性解放政策の一貫として、アメリカから提案された教育上の男女平等、男女共学が果たした役割は大きい。旧制大学における女子数は、一九四六年段階の調査では、国公立私学すべて合わせて八十名。大学における共学が可能になった翌年で、やっと一四一名である（橋本紀子『男女共学の史的研究』大月書店、一九九二）。橋本によれば、東京、京都の両帝大を除く帝国大学及び七つの私立大学は、戦前から学部学生として女子の入学を認めていた大学であり、一九四〇年代には学部学生として八十人以上の女子が在学していたという。これらのことを考えあわせると、戦後直後に共学の大学に進学した女性の数字はもっと低くなる。これまで、女子を受け入れるまともなベースがなかったのだから、当

たり前といえれば当たり前だが、今さらながらに、男女共学に学んだ女子の少なさに愕然としてしまう。

女性解放がすすんだのは、こうした「制度」だけではなく、多くの「モノ」が貢献している。天野正子は、「女性たちの生活パターンに大きな変化をもたらしたモノ」を三点にわけ考察している（『モノと女』の戦後史 身体性・家庭性・社会性を軸に）共著桜井厚、有信社、一九九二）。

まず身体に直接影響を与えたモノとして、生理用品、避妊具、下着、ストッキング、ジーンズ、靴、シヤンプー、パーマ、化粧品など。生活領域に直接はたらきかけ、そこでの日常性を変容させていくモノは、台所流し、電気洗濯機、トイレ、エプロン、財布、風呂、ベッド、味の素、インスタント食品など。そして女性たちを、社会に結びつけていくうえで大きな役割を果たすモノに、たばこ、手帳、電話、自転車、時計、アルコール飲料、乗用車、制服など。

こうした数々の「モノ」が、女性の身体、空間を解き放ってきたことがよくわかる。母が、たらいに家族

中の汚れものを満載して、手で洗っていた姿を見ていた私には、なかでも全自動洗濯機が、どれだけの時間と身体的余裕の恩恵をもたらしたかと思う。いや、現在の生活から、ガス、冷凍食品、電子レンジ、冷蔵庫、電気ポット等を取り除いてみよう。お湯一杯わかすにも、焜炉に火をおこすところからはじめ、その水を井戸から汲んでくることを想像してみよう。女性が何かをゆっくり考えたり、本を読んだり、まして実生活に「役に立たない」勉強をすることが、物理的時間の上からいってもどんなに難しかったかがわかるだろう。

ここで女子教育の制度を、もう少しさかのぼってみている。わが国最初の近代学校制度に関する総合的な基本法令が發布されたのは、明治五年（一八七二）八月。「自今以後一般の人民華士族農工商及婦女子必ず邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す」。いうまでもない学制の發布である。四民が平等に、教育の機会が均等であるだけでなく、ここにはじめて「婦女子」と明記されたことで、女性にも法的に学問の門戸が開かれたことになる。この学制には、男

女を平等に教育の対象にすえた新しい男女観があったが、女子教育のための独自の規定はみられなかった。ただ小学校の一種として女兒小学というのがあり、これは尋常小学教科のほかに女子の手芸を教えることを規定したものである。当時の為政者が、女子教育を重視したことは事実であるが、学制期の女子の就学率は予想外に低く、明治六年度は一五・一％（男子三九・九％）、明治十五年に至っても、三一％（男子六四・七％）に止まっており、幕藩時代にひき続き低かった。男子の就学もふるわなかったのは、経済的要因も大であったが、公立の学校は藩校系譜のものとしてとらえられており、民衆の世界からは縁遠いものと受けとめられていたからである。

なかでも女性が高いのは、男女平等がいかに明文化されたとはいえ、「七去三従」の教えが内面的規範となつて生きており、女性は裁縫と一家の経理ができれば（無学）でよいとされていたからである。たとえば学制前に英語を学び、新しい知識を求めた山川菊栄の母、青山千世を例にとると、勉学を許される要件に、

従来の伝統的な漢学の素養を身につけるだけでなく、まず「女芸」に欠かせない裁縫技術を修得する必要があった（『おんな二代の記』）のである。

もうひとつ、例を樋口一葉にとってみよう。利発な一葉に、父の期待するところがあったのだろうか、明治十年三月五歳一ヶ月という早い年齢で入学する。しかし、通学に無理があったようで、これは早々に退学、一葉の最終学歴は私立青海学校小学高等科第四級修了である。一葉は「七つといふとしより」「英雄豪傑の伝、任侠義人の行為」を好み、「くれれ竹の一ふしぬけ出しがな」との願いをもち、勉学への強い意欲を持っていた。しかし、母たきが、「女子にながく学問をさせなんは、行々の為よろしからず、針仕事にても学ばせ、家事の見ならひなどさせん」と主張したため、進学は止めになってしまふ。これはなにも、たきが一葉に対して苛酷であったためではない。当時の女性は「良縁」を得て「家庭」に入ることしかできなかった時代である。この当時、いったい自活できるどのような職業があったのだろうか。娘の「幸福」を願う母は、あ

くまで実学本位であるしかなかったのである。

この一葉が逝いて、百年が経つ。そして現在、女性に社会の門戸は、どのくらい大きく開かれたのだろうか。どのような職業についていても、いまなお女性に期待される役割モデルは、あくまで家庭を守る「主婦」である。女性が最も優先すべき仕事は何をさておいても育児であり、女性の身体は、家事・育児を天職とするへ再生産する身体Vという意味に覆われている。

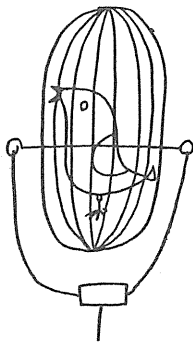
なぜ、中立であるはずの「職場」においてさえ、女性労働者を、働く「女」として、どこまでも「女」という意味が、問われ続けられるのか。なぜ女性だけが、仕事か家庭かの選択を迫られるのだろうか。性支配の構造は、いや性差に限らず、あらゆる差別・区別の構造は、歴史の或る時点において作られたものであることを、「学生」という特権的な自由な時間に考えて欲しい。

大正末年から昭和前期にかけての、いわゆるモダニズムの時代、今でいう「職業婦人」という概念がようやく成立してくる。この頃、新興の風俗産業として娯

えたカフェーは、多くの「女給」をかかえたが、その女給の前職は、家事手伝い、女中、農業、事務員、女工、裁縫、店員、ミシン、仲居、芸妓、看護婦、家業、交換手、タイピスト、女優、ダンサー、美容師、生花、三味線師匠、飲食店、劇場案内人、バス車掌、巫女、画工など実に多岐にわたっている。そしてまた、このくらいしか、「普通」の女性の職業はなかったということである。ことわるまでもなく女給には、単に飲食の給仕以上にエロティックなサービスが要求される。学歴

は尋常小学校卒業の女性が大半で、特に訓練も特技もなく「素人」であることのほうが歓迎される。

こうしてみてみると、現在小ギャルやブルセラ、テレクラなど、多くの「素人」の女子高生や、女性が一見、「自発的に」風俗産業に加担している状況と重なって見えてくる。過去が過去でなく反復回帰する歴史として、「今」が幾重にも見えてくるように、考えていくことのできる力を、在学中に身につけてほしい。



異文化体験による自己発見を

国際経済学部教授 花 枝 美恵子

「自分がやりたいことは何なのか」これについてある程度信念を持って答えることのできる人が何人いるだろうか。実現できるかどうかは別の話で、ただ「やりたいことは何なのか」と夢の部分を問うているに過ぎない。麗大で学ぶ学生の中でどれだけの人がこの問いに方向性を持った答えをするのだろうか、新しい年も一か月を過ぎようとしている最近、考えている。

きっかけとなったのは、ある意識調査を報じた新聞の小さな囲い込み記事だった。卒業を目前にした県内の三年の高校生に埼玉県が実施したもので、三人に一人が「自分に向いた仕事に分からない」という回答結果であったという。

こうした数字を前にすると充実した人生、大学生活を送るためにやらねばならないことが先ず何であるかがはっきりとしてくる。それは「自分がやりたいことは何なのか」時間をかけて問い続けるということだ。自己と向き合うと自分の長所、短所がよくわかり勉強への意欲が自然と湧いてくるだろう。「やろう」という気持ちになるだろう。

先頃亡くなった切り絵作家の宮田雅之氏は日本の美を追及した大変エネルギーな芸術家だが生前、テレビのインタビューで「…心のまとまりが生まれてくる。これでいいんだろうかと反復して考えながら日々創作活動をしている…」と創作現場での心の動きを表

現しておられた。私が特に驚いたのは「これでいいんだらうかと反復して考えながら日々創作活動をしている」というくだりである。宮田氏クラスの人でありながら（いや宮田氏クラスだからこそと言うべきか）日々自省していたというのだ。氏のこの率直な言葉を聞きホッとしたのを昨日のように覚えている。氏はまたこのインタビューの中で「日本人は日本のものを徹底的に追及することにより国際的になる」とも語っていた。

かつてマラソンランナーとして活躍し、現在はレポーターとしてその爽やかな語り口で人気のある増田明美さんも面白いことを言っている。「マラソンランナーには哲学者が多いんです。とにかく日に何十キロも走るから自然と自分の心と向き合う時間が多くなる。そこで自分なりの哲学が生れるんです。いつかそのことを追及したものを書きたいですね」なるほどと思う。一流のスポーツ選手に魅力的な人が多いのもこのためだろう。

人間が社会的存在である限り他との関わりから逃れ

ることができない。相手の立場で考え、他の人と共感することにより自分の世界を広げるということも、充実した学生生活を送るうえで大事な点ではないのだろうか。たとえ九十歳まで生きたとして、人ひとりが生活時間として享受できる時はそれほど長くはない。自分の経験だけではなく相手の経験も共有して人生を送ったほうが世界も広がるだろう。

来年二月に長野で二十六年ぶりに冬のオリンピック大会が開催される。「長野五輪まであと何日」という掛け声がこれからますます聞かれることだろう。私もとても楽しみにしている。ところで前回の札幌大会で学生通訳としてオリンピックに参加した私は様々な人との出会いの中で感動を共に分かち合い人生の中での良い思い出を作ることができた。

例えば、当時大学生だった私は「自慢の息子を持つとどれほど晴れがましい」気持ちか味わわせていた。スキートの滑降競技で優勝したのはスイスのルッシ選手だった。優勝した翌日、ルッシ選手の父親が真駒内のオリンピック村にある面会所を訪れ「私の息子

は札幌オリンピックの滑降で優勝しました」と日本語で書いてくれと言ってきた。記念切手のシート上でできるだけきれいな筆跡で書こうと緊張した当時を思い出す。周囲の人に吹聴するのでもなく、静かに喜びをかみしめている、雪焼けた清悍な顔を今でもはっきりと覚えている。喜びとはジワジワと込み上げてくるものだろう。後で分かったことなのだが、ルッシ選手にスキーマの手解きをしたのはこの父親だったという。自慢の息子を持った父親の気持ちはどういうものであるか垣間見たような気がした。

某知事の「みずすまし」発言が物議を醸したが、私はスケートが大好きだ。北欧ではとても人気がある。高速という点ではボブスレーも面白い競技だ。このボブスレーに関しても思い出に残る体験をした。

ボブスレーは非常に高速で滑る競技で、その速さは見た人でないと実感できないという。非常に勇気を必要とするという。「同じスピードへの挑戦をする者としてただその勇気に敬服して、いてもたってもいられずその勇気を称えたい」とある日、日本のカーレー

サーが面会にやって来た。相手のヨーロッパのボブスレーの選手との交流は非常に清々しかった。相手の選手も非常に喜んでいたが、面会後にこのカーレーサー氏はレーサー体験をいろいろ語ってくれた。例えばレース場で猛スピードで走行しているので前方のみ見ていると思いきや、スタンドに美人がいると、また一周してきた時にその美人を追って目がそちらにいつてしまうという。当時は「本当かな」と、こちらの話は実感を持って共有できなかったが今では何やら本当の話のような気がする。

共感は何も楽しいことのみで共感ではない。苦い体験への共感もある。「戦争を二度経験したからその分だけ長生きする権利がある」。留学先ドイツのケルンで家主の老婦人が実感を込めて語った言葉だ。

専門が多国籍企業論・国際経営論とEJ研究ということで、世界の動向には目を離せない。この二つを柱に研究を進めていると、おのずと世界との関わりが深くなる。しかし国内のことを論ずるにしても、国際的視点が必要ではないだろうか。世界を通して見ないと

日本が見えてこないとの実感を強めている。

最近の日銀の独立性をめぐる議論で痛切にこのことを感ずる。日銀の政策を政治からの影響力を排除した形で運営していくための制度作りには一定の方向が出た。独立性確保のための様々な仕組みが着々と整ってはきているのだが、制度としての形が整えば整うほど私にはその可能性よりも限界の方がますます明瞭になってくるのだ。

ドイツの蚤の市では現在では使われていない古い紙幣が売りに出されているのをよく見掛ける。ゼロの数が非常に多く、今日では考えられないほど券面が高額なのがその特徴だ。第二次大戦前の天文学的インフレに襲われた当時の事情を反映したものだ。このため市民の反インフレ感情は非常に強い。ドイツ連銀は世界中でも独立度の高い銀行として有名だがこれはこうした市民意識の上にも可能となった制度であり、こうした市民の反インフレへの強いこだわりが背景にあつてこそ初めて独立性の高い中央銀行が虚像としてではなく実像として社会の中で機能することができる。こう考

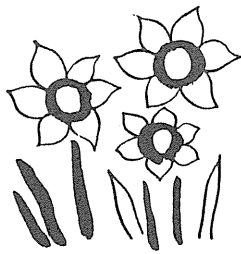
えると、インフレをめぐるドイツ人の強い痛みに相対するものがない日本で、中央銀行の独立性が果たしてどれ程確保されるのか、疑問に思えてならない。市民の強い意志がなければ制度は機能しない。仏ばかりを作っても意味がない。機能してこそ制度としての意味があるわけで、仏に入れる魂が何であるのか、それがあるのかないのか、ない場合どのようなして入れるのかをきちんと議論しなければ学問として片手落ちだろう。そして、この部分の議論には他国を知ることが不可欠なのだ。そして、もう一言付け加えると日本ではこの部分の研究が弱い……こう考えて、自分がEUの研究に携わることの意味を再確認している。

欧州の研究をして気付くもう一つのことがある。それは対象を外から見るときに生じやすい「ズレ」た視点だ。「ズレ」の矯正にはどうしたらよいのだろうか。ある種の「現場主義」がそれを救ってくれるのかもしれない。経済学者の飯田経夫氏がある書物の中で面白いことを言っていた。「自分は途上国について論じるときにはそこに先ず行ってみる。そしてその後で論じ

る」というのだ。少なくとも一度は実際に自分の目で見なければ分析できないという趣旨のことを言っていた。

麗大で学ぶ皆さんも大学時代、様々な機会を利用して異文化体験をしてほしいと思う。この点、最近の女

子学生は頼もしい行動派が増えているので楽しみだ。異国の地で感受性、発想の違う人と接触し、触発される機会を大いに持つのがよいだろう。それは新鮮な驚きに通じ、確実に明日の生きる活力となるのだから。



女性らしさ、男性らしさ、自分らしさ

外国語学部助教授 町 惠理子

毎年、麗澤大学では十一月に推薦入試を行っています。推薦入試には面接があり、私はこの数年英語学科志望の受験生を面接しているのですが、特に女子受験生の応答に考えさせられることがあります。面接では短い時間に受験者ができるだけ等身大の自分を出せるように様々なことを聞いてみます。時に、将来の希望や興味のある職業について聞くことがあります。確かにまだ高校生なので具体的な職業となると難しい質問かも知れませんが、女子の受験生の答えのほとんどが同じなのです。堅実な学生は英語教師、憧れを語る学生は通訳、適度に現実的なおかつ憧れを持つ学生はスチュワーデスカグラウンドホステス。十八歳で英語専攻

を考える女子にとって「英語が使えて国際的な仕事」を思い浮かべるのが精一杯なのでしょうが、その余りにも類型的な返答に面接官である私の方がとまどってしまいます。でも、彼女たちが非現実的な憧れだけを語っているのではないのは明白です。今年度の受験生には「スチュワーデスになりたい」という女子はほとんどいませんでした。航空会社が採用を控えていることを知っているからでしょう。また、なぜそのような職業に興味を持つのかと尋ねると、女子受験生の多くが「人と接するのが好きだから」と答えるのです。

私が考えさせられることとは、彼女たちの答えが二

十年程前の私が受験生だった頃の女子高校生の意識とほとんど変わっていないことです。この二十年ほどの間に、女性に対する教育や社会での機会は上げられて来たものの、若い女性に将来に対する多様なあり方を提示するまでには至っていない、ということでしょう。また、同時に私達は現実には男女雇用機会均等法などによって男性と「同じ」チャンスを与えられた、いわば女性の「エリート」達が決して同期の男性と「同じ」成功を納めてはいないことも知っています。いくら社会が男女に「均等な機会」を与えても、女性らしさ、男性らしさ、にまつわる社会の価値観、そしてその社会に生きる個人としての女性自身、男性自身の価値観が変わらない限り、両性の多様なあり方はまだまだ発展の余地があるのかも知れません。しかし、これはまた女性、男性という性別が存在するという事実が変わらない限り続く傾向なのかも知れません。

私の専門分野は異文化コミュニケーションで、文化の違いを扱っています。文化というとすぐ国や地域、

言語を思い浮かべますが、近年、性差も文化差として扱うという考えが広がってきています。もちろん、ここで言われている性差とは、生物的な性差(sex)ではなく、社会・文化的な性差(gender)のことです。文化を、ある集団が共通に持つ価値観、行動規範、シンボル体系の集合体と捉えると、国や言語の違いだけでなく、同じ社会の中にも異なる価値体系、行動規範をもち、特有のシンボルを持つ人々が存在し、それらの違いを受け入れないと社会の中でのコミュニケーションが成立しない、ということが明白になってきたからです。実際、学問分野として異文化コミュニケーション学が発展してきたアメリカでは、国内における民族間、人種間のコミュニケーションだけでなく、障害者と健常者、同性愛者とそうでない人などのコミュニケーションも「異文化」という枠組みに入れて再考しようという試みがなされています。そのなかで、性差も異文化として考えた方がいいのでは、という提案は自然なことでしょう。それは「女性らしさ」「男性らしさ」の見直しでもあります。男女平等が社会通念とな

っている現在、性差を論ずるには注意が必要です。安易に取り上げれば、既存のステレオタイプを助長しているとの解釈されかねません。また、性差を強調しすぎると、個人差を軽視しているようにも見えてしまいません。しかしながら、文化差を考えると同じように「違い」をあたかもないもののように扱うのでは、互いに理解し受け入れあうことは難しいでしょう。文化の違いや男女の違いを論じるとき、気をつけなければいけないのは、私達の心の奥に「違うこと」は良くないこと、なにか劣っていることのように考えてしまう傾向があることでしょう。

アメリカの社会言語学者で、家庭内や職場での会話分析を通して人間行動を説明しているタネンによれば、日常生活での意図しない誤解や他人に対する否定的な評価の多くは、会話スタイルの違いに起因しているということ¹⁾です。そして特に職場の男女のコミュニケーションにおいては、男性の使う会話スタイルが基準とされているため、女性が知らずに「女性らしい」

話し方をしていると「自信がない」とか「依存的である」とかの評価を受けてしまう、と分析しています。タネンは少年・少女達の学校や遊び場での会話分析研究を基にして、人間は小さい頃から同性同士を中心にした集団の中で特有の会話スタイルを養っていると説明します。これらの会話スタイルの違いをタネンは「地位」と「繋がり」というキーワードで説明しています。男性は少年の頃から自分の仲間を階級組織として捉え、その中で競争しながら人間関係を築きます。女性には少女の頃から友人関係を共同体のようなものと捉え、その中では突出することのないような平等性、類似性を強調した人間関係を築くのです。人間関係の維持の大部分は言語行動によるため、男女は互いに違う会話スタイルを身につけていく訳です。興味深いのは、この違いは日米のコミュニケーションの違いの説明によく似ていることです。しかし、日米のようにハッキリと異文化と認識される場合は、異なる行動様式に対処する心構えの必要性も気づきやすいのですが、同じ文化の男女の場合は同じ言語を喋っているため

に、自分達の行動パターンの違いに気づくには異文化における以上の感受性が必要でしょう。

タネンだけでなく性差に興味を持っている様々な分野の社会学者は、男女を取り巻く社会状況を指摘しています。歴史的に男性が中心になって社会を築いてきたため「社会の基準」には女性の価値観よりも圧倒的に男性の価値観が反映されていること、また、男性の基準に女性があわせようとすると今度は「女性らしくない」というレッテルを貼られてしまうこと、等等。そう考えると、推薦試験の面接で女性に適している、あるいは女性の仕事と定義されていてなおかつ評価の安定している職業を口にする女子受験生は、意識的にあるいは無意識に「女性らしく」振舞っているのかも知れません。

「女性らしさ」「男性らしさ」は男女の行動様式をあらわすだけでなく、多様な文化を分析する概念としても使われています。

比較経営学の分野で著名な組織人類学者のホフステッドは、八十数カ国のIBMの社員を対象に行った比較価値観研究から文化の違いを分析し、文化の四つの次元^②を見出しました。文化の次元とは文化を比較するときに相対的に捉えることの出来る側面で、ホフステッドは、(1)「権力の格差」―権威との関係をはじめとする、社会的不平等をどう解決するか、(2)「集団主義対個人主義」―個人と集団との関係、(3)「女性らしさ対男性らしさ」―男性としてあるいは女性として生まれたことの意味、(4)「不確実性の回避」―攻撃性のコントロールと感情の表現、の四つの次元の組み合わせで国民文化の違いを明らかにしようとした。本来はこれら四つの次元を組み合わせて論じなければならぬのですが、ひとつの次元だけを取り上げても、日本の社会を理解するときの十分な示唆が得られると信じています。

ホフステッドは性差と文化は切り放して考えられないという立場をとり、以下のように述べています。

どの社会にも男性の文化と女性の文化があり、両者が互いに異なっていることを認めれば、なぜ伝統的に根強い性別役割を変えることがこれほどむずかしいかを説明することができるであろう。女性性は、伝統的に男性が従事してきた仕事には適さないといみなされる。これは、女性がそれらの仕事をこなす技術を備えていないからではなく、男性の文化で重要であると考えられているシンボルを持たず、ヒーローのイメージに当てはまらず、儀礼に参加せず、その価値観を育んでいないからである。⁴⁾

私がホフステッドの理論を紹介するひとつの理由はこの「女性らしさ対男性らしさ」の次元で日本は研究対象となった八十数カ国の中で「男性らしさ」の指標が第一位だったからです。因みに「女性らしさ」の指標が一番高かったのは男女平等が進んでいるといわれるスウェーデンでした。「男性らしさ」を特徴とする社会では、社会生活の上で男女の性別役割 (gender role) がはっきりと分かれ、男性は自己主張が強くだ

くましく物質的な成功をめざすものだと考えられており、女性は男性より謙虚でやさしく生活の質に関心を払うものだと考えられています。それに対し「女性らしさ」を特徴とする社会では、社会生活上男女の役割が重なり合っており、男性も女性も謙虚でやさしく生活の質に関心を払うものだと考えられています。日本の美德として「謙虚さ」がよく挙げられますが、少なくともホフステッドの研究では、日本文化においては「謙虚さ」(女性らしさ)よりも「たくましさ」(男性らしさ)が重視されるという結果になったわけです。もちろん、これは特定の国際企業に働く社員を対象にした研究であり、これだけ日本文化が説明されるわけではないのはいまでもありません。

しかし、ホフステッドの研究が示唆するものは、既存の男女の性別役割をより柔軟に捉えたいと思っている人達には少々ショックかも知れません。それは、日本が「男性らしさ」を第一義の価値観として保ち続けるかぎり、理論上、社会における性別役割がそう簡単

には変わらないことを意味するからです。また、そう考えればこの二十年ほど様々な分野で女性参加の機会が増えながら、他の先進国ほど女性の進出が見られないことも理解できます。男女の役割が確固とした社会は安定した社会と言えるかも知れませんが、日本文化に生まれても全員が同じ思考、価値観、行動様式を持っているわけではないことを考えると、性差や文化差に規定されない生き方を「自分らしい」と考える人々がいても良いと思われれます。文化は人間の生きる術ではありますが、文化を伝える人間が変われば文化もまた変わっていきます。文化の変化の方向を船の舵を取るように操ることは私達には出来ませんが、自分が「自分らしく」生きる道を模索していけば、また、それを可能にする環境を作ることが出来れば「女性らしい」あるいは「男性らしい」だけの自分ではなく、「自分らしい」自分が認められる社会へと近づくのではないのでしょうか。

△注▽

(1) Deborah Tannen, *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*, New York: Ballantine Books, 1990 『わかりあえない理由』田丸美寿々訳、講談社、一九九二年): *Talking from 9 to 5: Women and Men in the Workplace*, New York: William Morrow and Co., Inc., 1994.

(2) ホフステットの研究が西洋的な価値観に影響されているのではと考えたポンドは東洋的、特に中国的価値観をとり入れた調査をし、五つ目の「儒教的ダイナミズム」と名づけた次元を見出した。(Geert Hofstede and Michael Harris Bond, "The Confucius connection: From cultural roots to economic growth," *Organizational Dynamics*, 16, 4, 4-21, 1988.)

(3) G. ホフステッド、『多文化世界』(岩井紀子・岩井八朗訳)有斐閣、一九九五年。(Geert Hofstede, *Culture and Organizations: Software of the Mind*, McGraw-Hill Book Company, 1991.)

(4) G. ホフステッド、前掲書、一七頁。

調和と創造

去年の暮れ、南柏の駅近くの商店で買い物をした際に、以前から顔見知りのその店の奥さんから、麗澤大学の学生さんはいつもきちんとしていますね、といわれた。毎年、大学祭のパンフレットに載せる広告のために、学生たちが依頼に来るが、もう何十年も変わることなく礼儀正しいというのである。大学の内部にいると、学生数の著しい増加や、服装や言葉遣いの違いなどから、学生たちの変化の方に気をとられてしまいがちであるが、外から見ると、麗澤大学の校風ともいえる一貫したものが今でも生きつづけているのか、と却ってこちらが感心してしまった。

私学で教育を受けたことのない私にとって、本学で

外国語学部教授 小田川 方子

はじめて触れた「建学の精神」というのは、新鮮なものであった。信じられないほどの小人数の学生たちと家族的雰囲気の中で行われた授業は、自ずから本学が掲げる「全人教育」を可能にするものであった。しかし学生数が桁違いに増え、また出身もモラロジーとは関係のない一般の家庭からの子弟が大半となった現在、「建学の精神」は、学生部をはじめとして諸先生や職員のかたがたの並々ならぬ努力によって継承されているのだと思われる。

最近のわが国や世界の大きなニュースには暗いものが多く、このままでは日本はどうなってしまうのか、人類は一体将来存続できるのか、という危惧の声も聞

かれる。しかしこうした行き詰まりの原因は、基本的には欧米型の現代文明のバランスを欠いた発展にあると私には思われる。現代において早急に必要とされるものは、「全人的な」真の人間性の回復―それには当然「知徳一体」ということが含まれよう―、人間同志のきずなの強化、および人間と自然の共生の意識であろう。こうした事柄は、実は本学の建学の当初から大切にされてきたものと思われるが、現代の危機的な時代において、それらは学内のみならず、まさに全世界に向かって開かれ、伝えられるべき価値を有しているのではなからうか。

もう二十数年本学に奉職しているのに恥ずかしいことであるが、去年はじめて大講堂の裏にある「更生館」を訪れた。それもMeditation Roomという立て札に引かれてである。前にちょっと、大講堂の奥に坐禅ができる場所があることは聞いていたが、確かでないままになっていたのである。中に一歩足を踏み入れて驚いた。ここは禅寺の内部にそっくりではないか。中は暗く、坐禅用の座布団がぐるりと並べられている。お

寺と違うのは、本学の創立者廣池博士によって詠まれた魂の短歌の本が座布団の前の机の上に置かれていることであった。静寂な空間に一人坐って、私は廣池博士のこころに少しばかり近づけたような感動を覚えた。後で欠端先生から、あの場所にはもともと樹齢五百年位の大樹があったが、それが枯れたので根元から切り、そこにモラロジーの中心の建物を建て、その前方に大講堂を造り、そこから真直ぐに桜並木を植えたとのことを伺った。モラロジーの教えは、根本において大自然と繋がり、それを尊敬するものであることを改めて認識した。

最近、深刻化する環境問題に対し、世界各国の宗教者たちが、「地球倫理」というキーワードのもとに、共通の活動を始めようとしているそうである。この言葉はもともと、本学でも昨年の夏講演をされたハンス・キュング博士が、人間と自然を含めた地球全体が二十世紀も生き延びていくための最小限の倫理という意味で使ったのであるが、それは現代のわれわれ一人一人が今の価値観やライフ・スタイルを見直すという

提案でもある。本学は、去年定年退職されたある教授が的確に表現されたように、「自然と人為の見事な調和」を守り続けてきたのであるが、こうした世界情勢の中で、「地球倫理」は教育の場においてこそ目指されるべきものであるし、また本学の伝統は、そのための貴重な貢献をなしうるのではないかと思われるのである。

自然について考えることは、われわれ自身の生命について考えることに繋がり、それはまた死について思い巡らすことにも通じる。生と死に関して、私は両学部の思想や文学を専門とする教員数名と、共同研究を続けてきたが、その成果を、今春『生と死の深みーアジアとヨーロッパの思想・文学における再発見』という本として出版することになった（広池学園出版部）。世界各地の死生観を辿ることによって浮かび上がってくるのは、生と死の本来の姿は、まさに大自然ないし宇宙、あるいはその根底にある目に見えない偉大な力との関係の中ではじめて明らかになるということである。廣池博士および人類に光を与えた先人たちの知

恵を、われわれは混迷の世の中で生き抜くための導きの糸として受け止めた。

二十一世紀は文明の大きな転換期となることが予測されるが、そこにおいてわれわれは、若い人たちが、新鮮な発想と巨大なエネルギーをもって、新しい時代の流れを創造していくことを期待する。私のゼミの卒業生や卒業予定者のなかにも、すでに環境問題を自分の一生の課題として自覚し、そのための勉強の道を国内や国外で歩み始めているものがある。また障害者のために働こうと、そのための施設に就職をした者もあるし、地元で家業を継ぎながら、ボランティアで地域や社会の発展のための国際的な活動をしている者もいる。表だつた実践をしていなくとも、卒業後も自分の出来る範囲内で、自分を磨き、社会に貢献している者は大勢いよう。麗澤教育は、縁あって本学で学んだ人々に、生涯にわたって追求できる生きる目的を示唆し、彼等の意欲と創造力を引き出すことが出来るものであるよう願ってやまない。

現代若者の宗教意識

—親子心中を手掛りとしてその問題と背景を探る—

国際経済学部助教授 保坂俊司

はじめに

筆者に与えられたテーマは「現代若者の宗教意識」ですが、このテーマはなかなか複雑な問題を含んでおり、一筋縄では理解することはできないと思われまです。そこで、本テーマを理解するために、まず幾つかの段階を踏んで行こうと思います。というのも、本テーマには、現在、若者、宗教意識という三つのそれだけで十分過ぎるほどの問題が内包されているからです。

勿論、そうは言ってもこれらを個別に扱うことを本小稿ではいたしませんし、その余裕ありません。ただ、これら個別の問題と全体テーマを結ぶ何かを捜し

出して、それを切っ掛けとして「現代若者の宗教意識」の一端を明らかにして行こうと考えます。

親子心中と日本的な心情

筆者は、麗澤大学の学生を中心に「文化や文明の背後にある宗教あるいは宗教的なるものの存在」というテーマを、一貫して教えております。しかし、日本人一般にはこのテーマはなかなか理解してもらえない点があります。なぜなら、日本には非常に特殊な「宗教」概念が、明治以降の近代化政策によって形成されており、「宗教」に関する認識は他に比べようもない程に矮小化されているからです。したがって、筆者の講義

は、常にこの日本的な常識としての、意図的に矮小化された「宗教」観の枠組みを、広く世界に通用するような宗教認識に拡大させることからはじまります。そして、そのために与えるテーマが「親子心中」に関する考察なのです。

このように書くと、両者にどのような関連があるのか疑問をもたれる方も少なくないでしょうが、この「親子心中」こそは、極めて日本的な現象であり、しかも日本的な宗教意識（精神性を含む）に深く根ざしたものであり、同時に若者の宗教意識を知るには絶好のメルクマールとなる、と筆者は考えています。

ただし、ここでは心中をテーマにするわけではありませんので、心中についての細かな検討は留保しておきまして、この「親子心中」について、現在の若者がどのような感想をもっているか、を簡単に紹介しましょう。

この問題についての本学の学生（現代若者を代表させています）の意見は、おもしろいことに賛否両論が明確に別れます。といっても、「親子心中」を直接肯定

するという意見はほとんどありません。それは「親子心中」といえども殺人事件であり、しかもある意味で最も悲惨な殺人事件ですので当然といえましょう。ただし、意見の相違はこのような行為に至った、つまり「死を選んだ親（特に母親が圧倒的に多い）の心情」についての分析の段階から明確になってきます。つまり、あくまでもこの「親子心中」という事件を殺人と位置付けて、一般の事件との差異を殆ど認めようという意見、あるいは理解不能としてしまう意見と、何らかの心情的な共感を示す意見とに二分化されるのです。そして、前者の殆どは留学生であり、日本人の学生の殆どは心情的に共感的で、留学生のようにいわば思考停止型の拒絶反応をこの問題に示すことは、非常にまれなのです。

勿論、筆者が採ったアンケートは麗澤大学生を中心に過去五年の約一千人余であり、それをもってこの問題を断定的に論ずるつもりはありませんが、筆者がこのアンケートを採るようになって驚いたことは、「親子心中」への潜在的な共感意識が意外に若者の間に共

有されている、ということでした。それは「私は結婚

もしていないのでわからないが、子供を道連れに死ななければならぬ、という状況に置かれたときに、私も心中という方法をとらないとは断言できないし、もし母親（あるいは父親）と一緒に死のうと追って来たとき、はつきりノーと言えるか確信がない。勿論、死ぬのは嫌だけれど……」という学生の意見に典型的に現われているように思えます。しかも、このような意見は決して少数派ではありません。大学生にしてこのような意見ですから、ましてや年端もいかない子供たちであれば、その結果は明白でしょう。というのも、親子心中事件は、その悲惨さのわりには、日本においては決して珍しい事件ではありませんし、時には共感さえ持たれる事件です。例えば、東京都下において一八四年一年間で二〇件の親子心中があったとされていますし、未遂によって生き残った親は、一般の殺人事件より刑罰は遥かに軽減されます。ところで、日本における親子心中のこの数の多さは一体何を意味するのでしょうか（湯沢雅彦『凶説家族問題現在』日本放送

協会一九九五より）。

筆者は、この現象を現代日本社会が抱える様々な問題の集約されたもの、という理解が可能であると考えています。というのも、同じアンケートを留学生にするとこちらは一〇〇パーセント否定的であり、「日本に来てこのような悲惨な事件が存在することに、大きな驚きを感じた」と述べる留学生は多いのです。彼らは「何故このような悲惨な事件が起こるのか、まったく不可解であるが、日本人がこのことを一向に防ごうとしないのには何かわけがあるのであろうか」と首をひねりつつも、「子供を私物化する日本の親の心情が解らない」、あるいは「すぐに死を選ぶ日本の親は弱いのではないか」、さらには「日本社会には、困った親子を助けようとする親戚はいないのだろうか」というような分析をして見せてくれます。親子心中に対して留学生達が直観的に感じる違和感や不可解さとは、文化人類学などという「構造」という概念にあたるもので、現在日本文化の最も根底にある見えない、あるいは意識されることはないが、人々に常識として共有されて

ているがゆえに当たり前になっているその文化にのみ固有な価値観、を感じ取っているからに外なりません。というわけで、親子心中という現象は、現在の日本人の文化的な探層、さらには精神性や宗教性を探る象徴的な存在と位置付けられるわけです。

したがって、この問題を社会的な側面から社会福祉の不備、核家族化による様々な弊害あるいは家庭における父親の不在と、それによる母親への過重な精神的負担増などからのみ説明しようとしても、十分解明しえないということになります。つまり、この問題には、現在の日本人の宗教意識というか、精神性が横たわっており、そこに分析のメスを入れない限り、若者の宗教意識は言うに及ばず、日本人全体の宗教意識の問題点も明らかにはできない、と筆者は考えています。

筆者は、日本独特の自殺形態としての親子心中の根底には、日本人の宗教性の喪失、あるいは希薄化の問題、さらには言えばこれらが支えた社会構造の崩壊がある、と考えています。

このように言いますと親子心中と宗教性がどのように結びつくのか、という疑問に思われるかたも多いでしょうが、ここにこそ現在の若者の宗教観にも、そしてさらにその若者達に象徴的にみられる現在日本社会が抱える重大な問題を生み出す要因があるのです。以下においてこの点を検討してみましよう。

親子心中の精神的な背景

さて、心中という言葉が今日のように、道連れ自殺をいみするようになったのは、近松門左エ門の「曽根崎心中」であつたようですが、しかしその場合の多くは、諸般の事情で結婚できなかった恋人どうしの悲恋の結末、というものでした。このような悲恋的な道連れ自殺は、日本に限らず社会的な規制の強い地域では見られる事件のようです（もっとも、これも江戸時代のような身分制度の確立以後に頻発したようです）。しかし、親子心中ともなると、事情は異なります。ところで、ここで親子心中を考える場合に、まず親と子の関係ということが問題にされねばなりません。

つまり、親と子という関係は決して生物学的な親子関係だけで説明されるものではないからです。紙幅の都合で詳しい検討は省略しますが、近代化の過程で日本は、文化的な遺産の多くを犠牲にしてきました。その最大のものが家族観（社会構造）と宗教意識です。以下においては、この二つの要素について検討してみましよう。

しばしばいわれることですが、日本には比較的古代的な信仰や文化が、つい最近まで色濃く残されています。たしかに地方の神道の祭りなどには、数千年来の日本の伝統が部分的ではありますが継承されています。この言わば、日本的な文化の形態は稲作労働に基礎を置く村落共同体と合体して、一種の同族（地域密着型の血縁関係集団）を形成し継承されてきた、ということですが。その中では、いわゆる親子関係は、縦にもまた横にも拡大され、血縁関係を基礎とする関係性の社会が、特に強く形成されてきました（これは、キリスト教などのように絶対的な神を持たなかった、ということと深く関係しており、日本的な特徴の一つで

す）。従って親と子の関係は、今日の大部分の家庭の内に見られるように唯一的（つまり核家族における親子関係のようなもの）なものではなく、幾重にも重なった関係でした。つまり、三世代、あるいは四世代が同居し、村落そのものが血縁関係体であり疑似親子関係によって形成されてきたのです。

このような社会においては、善い意味でも悪い意味でも関係性が、個別性に優先する社会ということになります。そうすると、子供の存在そのものも、一親等の関係（つまり現在の核家族）の親子関係のみから考えられるだけでなく、地域の構成員としても位置付けられ、その役割を期待されるという意味で、子供といえども親子関係以外の社会的な役割を担われる、ということになります。つまり、幾つもの関係によって一つの人格が形成される、ということになります。このような社会では、確かに個性や獨創性は育ちにくい面もありますが、その一方で常に共同体に支えられているという安心感は得られますし、連帯感の強い社会が形成されます。と同時に、個々の家庭の子供に対

する責任も分散されています。そしてこの協同体は、様々な宗教行事を中心に、常に一体感を醸成する機会を持ち、また人々もそれによって存在意義を常に確認していたのです。このような宗教を中心とした地域密着型の集団が、つい最近までの日本の基本的な生活であった、ということをお我々はいま一度思い出す必要がある、と思われまます。

さて、日本社会は明治の近代化、言いかえれば近代キリスト教合理主義思想に支えられた文明を模倣し、古来の文化形態を放棄するまでは、以上のような血縁的な関係、つまり地域密着型の関係性社会において生きてきたのです。

ところが、明治以来の近代化の過程でなされたことは、日本を西欧社会化することでした。一般にはこの方針は「和魂洋才」といわれるように、技術面や産業面にのみ限られた限定的なことのように言われますが、それは文化や文明の変動という視点から言えば、まったく虚偽の認識、といっても過言ではありません。つまり、産業形態が変わるといふことは、それ自

体社会全体が変化するということであり、その変化以後に育った人々には、それ以前の人々との間に、決定的ともいえる差異が生じるということを見逃しているからです。というのも、明治以後の近代化政策と、それにもなう民衆の犠牲特に伝統的宗教生活の破壊は、すさまじいものがあつたからです。

さて、異なる文明を接種し定着させるというためには、つまり、日本のように単なる西洋の形態的な模倣にとどまらず、自らを疑似西洋化しようとする場合には、その文明を形成している基礎、つまり「構造」としてのキリスト教的な発想つまり信仰をも、基本的な前提としない限り十分に機能させることは難しいのです。つまり、自我や自己の確立というものが、存在しはじめた西洋近代文明のもろもろの要素が、十分に機能することとなるのです。

ところが、日本では疑似西洋化はしましたが、その基礎をなすキリスト教を受け入れることはしませんでしたから、個人々人を結果として総合する神の存在が欠落した文化を形成してしまいました。つまり自我を主

張するが、同時に自我を神の名において抑制させる倫理観という、自我の対概念ともいえる部分が欠落した社会を形成してしまったのです。そして、今日の状況を生み出すわけですが、その検討には二つの大きな段階を踏む必要があるでしょう。

つまり、明治から第二次世界大戦の敗戦まで、とその後とです。基本的には近代化の期間ということになるのですが、その背景はやや異なります、というのも敗戦前までは、日本には西洋のキリスト教にあたる神道（所謂国家神道、以下同じ）があり、近代化にとりなう伝統的社會の改革によって生ずる様々な精神的問題点は、この神道が受け入れてきました。その意味で、社会と個人、家庭内の親子関係さえも神道の教えを通じて、全体としての国家との結びつきを強く意識させられたのです。例えば、天皇は国家に父、国民は赤子という具合にです。つまり、従来の村落協同体が国家へと拡大された、ということになります。この場合には、個々の家庭における親子関係は、国家という全体性の中で常に意識され、いわば開放型の家族意識

が形成されます。これは従来のような言わば地域密着型の親子関係から、国家という空想的な存在へとその基盤が移った分、関係性の社会は希薄化することになります。従って、以前に比べれば、多少個人や自我という思想が育ち易くなりました。また、その一方で地域社会との関係性を失った分を現実的には親や家庭が直接補うこととなり、家における子育てに関する役割の比重が大きくなった、ということが言えます。しかも、やや細かいことですが、日清日露の戦い以後の人口政策により人口が急激に増加したために、大正時代ころから急激に、核家族が増え、それが産業構造の変化と相乗効果をもって、地域的密着型の従来の日本社会の枠組みを大きく変化させたことは、戦後の団塊の世代における急激な社会変化と、それに伴う人心の変化を考える上で注目すべきだと、筆者は思っています。

もっとも、戦前の場合には、その空隙を国家への忠誠の概念で埋め合わせたために、西洋的な神と個々人との関係によって形成された個人や自我というものとは

全く違ったものとなりましたし、現今のものとも違っておられますが、いずれにしてもこの結果、村落協同体の血縁的結合から、国家という理念的な協同体へとそのアイデンティティの中心が移行してゆきます。特にこの時代は、個人や自我ということは全体である国家の構成要素として認識されたために、強調されることはありませんでした。また、明治政府は国家の基礎を個々の家を最小単位に据えたために、家という複合家族の存在が強調されることになりましたが、家の構成員である個人という概念を育てることはできませんでした。というより、国家が強調されすぎたために個人の存在が疎かにされて、戦前のような結果を招くことになった、と考えられます。

以上が、伝統的な日本の社会の崩壊過程の、第一段階です。そして、次の段階が、今日の精神性に直結する第二次世界大戦後の日本社会になります。

関係性の喪失と家庭の孤立化

周知のように、敗戦を期に日本社会は大きく変貌し

ます。その中で最も深刻な変化は、神道という精神性の基礎を奪われたことです。これで日本は、伝統的に培ってきた宗教原理の多くを失ったことになりました。つまり、明治の初頭に仏教を排仏毀釈で切り捨て、こゝろは神道まで失ったのです。これで日本は宗教という文化形成の核となるものを、殆ど失ったことになりました。このように書くとは疑問に思われる方もおられるでしょうが、詳しくは拙論『『宗教』喪失社会日本の形成』（『麗澤ジャーナル』（4-12））を参照してください。

ただし、精神的な核を失ったことの本当の結果、つまり文化継承という意味からすればダメージは、時間差をもって文化の表面に現われてきます。筆者の研究領域からの常識では、大体二世代を経た頃から、その影響は急激に現われて来ると言われています。つまり、新しい価値観で育った人々の勢力が多数派になった頃以降ということですが、日本では例えば戦後四〇―五〇年を経て、戦後世代が社会の中核となった頃からのこととなります。この数字はつまり一九八〇年代以降

の日本の変動振りは、決してこの精神的核、つまり宗教無き世代の活躍と無関係ではないのです。しかも、そのような世代に育てられた子供たちが、さらに純粹培養的に親の世代の行動様式を模倣し、純化し、加速度的に拡大再生産してゆくのです。その結果が、現今の若者達の行動様式に影響を与えているのではないのでしょうか。

ではこの戦後世代の持つ世代的な特徴とは何でしょうか。それは、精神的な世界（社会関係も含めての世界）に対する基本的な意識や知識の欠如であり、無関心です。そして、本来は宗教世界において見いだすべき精神的な充足感や幸福感といったものは、従来以上に物質的なものによって置き換えられることになります。つまり、一般にいわれる道徳性や倫理観、公共の思想などが希薄となり、その代わりに車やブランド品といった目に見える物への執着や、ナンバースクールや有名企業への所属ということが、一種のアイデンティティを形成する基準となり、常に他者による自己の格付けということですか、自己を表現できない文化を

形成してしまったのです。この現象は、宗教という絶対的な価値の基準を失い、あるいは少なくとも戦前にはあった国家という抽象的ながらも強烈な公共性を持った、帰依（いわゆるアイデンティティの核）の対象すら失ったが故の不幸ということができましよう。

つまり、宗教を失った日本は、精神世界の一切を封印し、ひたすら即物的尺度、あるいは相対的な尺度で自己を形成しようとしてきたのです。さらに、国家への忠誠という全体性を失ったために、不完全な自我が肥大化し、まさに欲望を核とする自我観が形成され、他者性が欠落したエゴイスト社会が形成されるに至ったのです。

その結果、現在の若者の一部に見られる精神面の未成熟さや道徳性の希薄さ等の問題が生み出されると考えられます。しかし、若者達に見られるある種嫌悪すべき現象も、実はその責任の殆どはそれを育てた親や社会の側にある、ということを決して忘れてはならないのです。なぜなら、子供は親や社会の目指す方向性を純粹に拡大再生産するからです。

以上のことを背景として考えますと、現代社会はやはりかなり問題を多く含んだ社会である、ということになるのではないのでしょうか。特に、深刻なのは、日本文化の基本構造であった関係性の編目が、殆ど解かれてしまっていて個人あるいは家庭が、社会から意識的にも、また社会構造的にも孤立化してしまっている、ということだと思います。この点についてはわざわざ事例を挙げることもないとおもわれますが、互いに共通根を持たない人間の疎外感、孤独感、不安、恐れ等が、今日の日本社会を覆っているとすれば、それは文化的のみならず社会的にも危機的な状況ではないでしょうか。若者達の鋭い感性は、恐らく本能的にそれを感じとっているのではないのでしょうか。

以上のことを前提とした上で、親子心中のことを最後に考えてみますと、その背景はかなり明確なものとなると思います。つまり、近代化によって、あるいはより直接的に敗戦後の宗教を失った現代の日本人は、それによって支えられた社会的な結びつきをも失い、互いに孤立した単位として生活することを余儀なくさ

れてきたのです。勿論、それはそれで決して全てが悪と、見做されるものではありませんが、それも行き過ぎると様々な問題を生じてきます。特に、社会的な関係の絆を失った人間の、最後の拠り所は、直接的な血縁関係である親子関係に収斂して行きます。そうすると親と子の関係は、過度に緊密化されることとなります。特に母親と子供の関係は、緊密化してゆきます。結果として、母親の役割は過度のものとなり、ついには限界を超える場合さえ起きてくるのです。ところが、この母親自身も社会から孤立し、また家庭そのものも孤立しているとすれば、いかなることになるか、想像がつくというものです。現代日本に親子心中が頻発する背景はこのような、日本社会の関係性の欠落状態に多くの原因がある、という結論はいささか突飛でしょうか。筆者にはそうは思えないのですが。一方で、子供達もこの重圧に耐えかねて、様々に屈折して行きます。彼らの一見奇異な行動は、やはりその背後に親子心中と同じ問題を抱えている、ということが言えましよう。

まとめ

アリストテレスの有名な言葉に「人間はポリスの存在（動物）である」というのがありますが、人間は孤立しては存在しえない、ということとは自明のことなのです。そして、それは時代や地域や文化・文明の形態がいかなるものであっても決してかわるものではないのです。しかも、この言わば関係の動物である人間が、真に他者との関係を結び人となるためには、その根本に宗教の存在が不可欠であるということを、日本の近代の歴史は我々に教えてくれているのではないでしょう。宗教という一昨年のオウム真理教事件などに代表されるように、危険でしかも胡散臭いように思われがちですが、それは宗教の極一部の形であっ

て、宗教の全体像ではありません。紙幅の都合で宗教については、議論できませんでしたが、宗教は孤立する個人と社会を結ぶものとして、長い人類の歴史の中から生み出された装置であるということができます。

従って、その回復が今後の日本社会の課題、ということになるのです。そのためには、過去の歴史から真摯に学び、宗教性の回復を現代社会に合った形で行なうことが求められるでしょう。学生達のアンケートの中にも、それを求める心は随所にみいだせる、というよりそのような心を満たす何かを強く求めていることが、よく判ります。しかし、では「それはいったい何か」ということですが、その問題に答えを出すまでに、筆者の力が残念です。



麗澤大学に芸術の香を

日本美術家連盟会員
アートクラブコーチ
水野淳子

麗澤大学は文化面が遅れていると云われて久しいのですが、改善されるどころかますます隅へ追いやられて

いる感があります。三年前大学寮の桜並木の、花の一番美しい盛りの木が八本も、ある日突然切りたおされ、無味乾燥な黒い塀が建てられた時には、言葉もない程驚き、嘆かれた方も多かったと聞いています。

良寛の如き自然観と優しい感性を持たれた創立者廣池千九郎博士の魂はどこへ行ってしまったのでしょうか。日本人にとって桜は日本の心・命です、しかも納骨堂の近くですので、この事実を風化させず、真摯に受け止め大いに反省してゆきたいと思えます。

学長先生始め多くの方々が麗澤大学に芸術の心をと

願っていらっしやるのかねがね伺い、ボランティアの美術コーチとして一筆書かせていただきます。

昨年から麗澤大学「絵の会」も「アートクラブ」と名前を変更して創造の門を広げ、いろいろな分野にチャレンジしたいと願ったのですが、実情は計画通りにゆかず、アートクラブの部室が大学院創立のため、工事現場の飯場の様な場所に移転、美術教室とは名ばかりの物置と化してしまっただけです。勿論水道は階下までゆかなければ使えず、絵を描くスペースも無く、おまけに出入口が迷路の様に不便なため部員も集まらなくなってしまったのが現状です。

大学生活においてクラブや同好会活動を通しての人

間と人間の心の繋がりは、何にも代えがたい人生の財産となり、バランスの取れた人間形成に役立ちます。

もろもろの悩みや矛盾、ストレスを癒してくれる友情、堅いチームワーク作り、激しく燃える青春のエネルギーを受け止めてくれる、運動や創造の喜びは、学生が自由に使える施設や教室が無ければ実現出来ないのです。昔の麗澤大学には学生達が共有できるスペースがあちらこちらにありました。

亡き宗先生や桑原先生が御存命中には、昔の小講堂（現在記念館前広場）の一部の広い部屋を美術教室として学生達が自由に使っていました。私は教職員の子弟達に児童画を教えるため、空いている日時に使用させていたっていました。また宗先生の作られた詩のサークル「詩田」もあり文化の香の高い麗澤大学であったと懐しむのは私ばかりではないと思います。

学生達は入学を前に、麗澤大学を見学して、生涯学習センターの施設も学生が使えると思い、この大学を選んだと申しています。入学してみても会員会館はあっても学生会館は無く、他大学に比べ自由に使えるス

ペースが皆無で「だまされた」と愕然としたそうです。

学生達は皆、物事を純粹に考えています。今の子供は「贅沢だ」と一言で片づけてしまわず、他大学を参考にし、学生の立場に立って考える事が、真の教育、創立者廣池博士の理念に通じると思っています。

またアート一つ取ってみても、今の学生は情報社会の中で育ち、多様化され、常に新しさを求めています。教職員の目にはマンガの様に見える絵も、彼等にはポップアートの世界です。本当の現代アートとは何かと、私達は古い観念を捨て、もっと広い視野に立ち学生達を理解すべきです。

一橋大学学長の阿部謹也教授は「学長からのメッセージ」（読売新聞）で「大学時代に学ぶべきことは人生とは、生きるとはどんなこと…生きることについて答えを出している人の本を読む…良き友人、恋人を見つけること、映画を見ることなど、生きることすべてが勉強です。そして、自分が理想とするような指導者に会えたら、大学生活は成功ですね」「人は人と接することでは成長できない」「人と接して自分を知る」と

言い切っておられます。

学生達が人と接して成長出来る学生会館を建てていただき、各部室を作り、頭脳の面だけでなく、心と感性を育む教育に目を向けていただきたいと思います。

この教育方針こそ、冬の時代を迎えようとしている、日本の私立大学の中で生き残る事の出来る大切な要素ではないでしょうか。

私は三十年間、柏市の文化面に係わって参りました。柏市文化連盟の会員でもあり、柏市のミスコンテストの審査員も度々務めさせていただきましたが、柏市は商業面に力が入り、文化面が後まわしになります。特に市民ギャラリー等の数が少なく貸りる場合は抽選で決めるのが実状です。

そこで提案ですが、廣池千九郎記念ホールを建設して、入学式、卒業式はもとより、大学祭、高校の文化祭、女性講座の年二回の発表会や、文化、芸術の催物に使用して、空いている日時を近郊の市民に貸し出せば、学長先生が提唱されている社会貢献に結びつき、

これからの心の時代、高齢化社会に向け、需要も多く、長い目で見れば建設費も捻出される事でしょう。

何より創立者廣池博士の精神と名前も広まり、これこそ柏生涯学習センターの名称にふさわしい建物になり、シンボルになる事と思います。

最後に、私は廣池博士によって、この世に生を受けました。私の両親は高齢で父が五十歳と五十一歳、母が四十六歳と四十七歳の時に年子としこを授かり、昭和十二年当時の医学では、母体を助けるため、私は搔爬搔はされる運命でしたが、廣池博士の「医学より神を信じて生みなさい云々」の指導の下に母は命がけて私を生んでくれました。

廣池博士の一生は命の尊さを説かれ、人間形成、特に心の問題を重視して廣池学園を創立されました。

廣池千九郎記念ホールが建設され、このホールに、廣池博士の願ひであった、世界平和を誓い、二十一世紀にむけて、文化・芸術の向上のために、皆さんと共に夢を託したいと切望致します。

茶道を学んで

§麗澤大学の茶道部の活動状況

現在の茶道部には表千家と裏千家の二つの流派があり、運営上は一つの部として活動していますが、それぞれに師を招いて、週一度曜日を変えて、稽古に励んでいます。お稽古を共にする機会がないため、お互いの違いを見いだすことはありませんが、共通しているのは茶道を通して様々なことを感じ、学んでいることです。近年、部員数は増加傾向にあり、今年度は合せて六十名以上にもなりました。携帯電話の音が鳴り響く世の中で、心の豊かさを考える場を求める学生が増えているということなのでしょう。実際、授業の合間をぬって部室にきて、稽古に励んでいるとき、何か

麗澤大学茶道部部长（裏千家）
外国語学部英語学科四年生 熊谷和佳子

心地よさを感じている学生は多いようです。

私は裏千家茶道のほうを学んでおり、今年度は部長もやらせていただきながら、改めて茶道の良さを感じています。また、今年は裏千家にとって、部室から離れて活動する機会も多く与えられ、勉強になりました。

四月：大学院開設記念式典にての呈茶、五月：淡江大
学とのスポーツ・文化交流派遣に同行、七月：七夕茶
会、八月：城西国際大学茶道部の茶会に招待される、
四年生の筒井いづみさんが京都の裏千家お家元にて学
生セミナー参加、十一月：大学祭茶会、他大学（中央
学院大学など）との交流など様々な活動して参りまし

た。

表千家のほうも春休みに合宿を行ったり、大学祭では野点のだてをして多くの方に喜ばれるなど積極的に活動しているようです。どちらも、茶道を学びながら各々の精神を磨く場として日々の稽古に励んでいます。

§ 茶道から多くのことを学ぶ

私が茶道を学んで三年経とうとしています。以前は点前作法のルールにとらわれがちであった自分から、点前作法の規律正しさや手の運び、人との対応の仕方、挨拶など細かいことに目を向け学ぼうとする姿勢をもつようになりました。大学では、茶道部という痛い正座や難しい礼儀作法ばかり教えられて、日々の暮らしとはあまり関係のないのだと勘違いしている学生が多いようですが、そうではありません。作法はスポーツの中でいうルールのようなもので、よく知らなければ楽しむことができません。

その茶道の根本となる精神というのが、「和敬清寂」の四つに尽きると利休居士はいわれたそうです。「和」

とはお互い同志が仲良くする、和し合うということ。「敬」は尊敬の敬であって、お互い同志が敬い合うという意味。「清」は清らか、清潔を意味し点前の諸動作、道具の扱い方にも、特に強調される所であり、さらに静に通じて静寂であり、しんとしたなかに、どっしりとした落ち着きがあるということ。「寂」は茶道の美の最高理念である「わび・さび」をさすと同時に、己を知って足るを知る心のこと、深い思索に裏付けられた安らぎでもあります。深く禅を学んだうえで生まれて来たこの思想は、「人間はいかに生くべきかという問題に対する答えでもある」と私たちは教えられ、実行しようとして心掛けています。

§ 出会う喜び

茶道を学ぶ喜びと共に、一碗のお茶を通じて出会う「二期一会」の素晴らしさも実感しています。例えば、五月の台湾、淡江大学との文化交流の際、淡江大学の茶道部と言葉がうまく通じなくても共にお茶を楽しむことができました。茶道はもともと奈良時代に中国か

ら日本にもたらされたといわれています。彼らのお点前を拝見していると、全く同じではなくても、確かにそのような歴史にうなずけるような事がいくつもありました。特に、お茶の精神においては共通するところがたくさんありました。同じような文化を共有できることを知って、日本文化の国際的な発展と世界文化への貢献の可能性を感じることができました。

また、私は大学の授業の合間をぬって、師のボランテニア活動にご一緒させていただいております。茶道の心得のある者、ない者に関わらず、全てのひとにお茶を楽しんでいただくようと考えておられる師のアイデアによるものです。月に一度ずつ、老人ホームと障害者の作業所へ出向いて、無償でお稽古の指導をなされています。私は、お手伝いさせていただきながら、茶道を通じて出会う多くの人々の笑顔のおかげでほんとうに茶道を学んでいて良かったと思います。おじいさんたちのうれしそうな笑顔や、作業所のひとたちの体で一生懸命表現してくれる喜びはとても純粋で私が彼らから学ぶことはたくさんあるからです。

§ 茶道部のこれから

他大学との交流によって、私たちの部活動の改善点を見つけ、向上するよう努力しています。他の大学に比べて、部員数が多いのですが、一人一人の上達が少し遅いようです。炉をはじめ道具や施設が十分でないことも理由の一つにあげられるかもしれませんが、心掛け次第だと考えています。最近では、不足分の炉をまるであるかのように工夫して稽古をしています。ひとりでも、多くの部員が茶道の良さを実感し、普段に生かせるように頑張っているのです。また、できるだけ多くの部員が京都の家元での学生セミナーに参加できるように師にも協力していただいております。

茶会で出会う人、空間、道具、お茶のすべてに五官を働かせ、楽しむことは、この複雑な社会では贅沢なときかもしれません。しかし、そのゆとりのようなものを、お点前に没頭しながら、心の汚れを清めながら、日常生活へ生かせるように稽古に励んで行こうと思っています。また、軌道に乗った私たちの部活動を多くの人に理解してもらえようように、微力ながらも、

協力し合って頑張って行きたいと思っています。

部員数増加に伴い昨年春より部長として、師のお手伝いとして新人生の割り稽古の指導をする機会を与えられています。しかし、実際は帛紗くさ捌はきやお辞儀の仕方など一つ一つの動作の意味や茶道の奥深さに自分自らが改めて感じ、初心に返る場となります。また、お茶道具には普段の生活からは学べないような歴史や由緒があり、それらを学ぶことにより、お道具ひとつひとつに対する扱いに気を配るようにしています。そのような心くばりやけじめを毎日の生活で実践しようと努力しています。そうした積み重ねを様々に応用することを通して、日本の伝統文化としての茶道と他の

国々の文化との関わりあい、また日本人としての自己と国際社会で果たす自分の役割などを茶室という聖なる空間のなかで考える今日このごろであります。

就職活動の場において、「面接官に「なぜそのようなきれいなお辞儀ができるのか」と問われた部の先輩方の話をよく聞きます。四年間の稽古のお陰で規律正しさ、節度ある人と人との対応の仕方、身体全体の動作

などが理屈ぬきで体に身についているのだと思います。型ばかりにとらわれがちな近代社会で、中身（心）の伴った礼儀の必要性が高まっているように思えます。茶道は点前作法を学びながら、知らない間に人が守らなければならない道徳、儒教でいう五つの徳の仁、義、礼、智、信にかなっており、それをいかにして実行していくかを導き、習慣となって、毎日の行いにも、うっかり見過ごしたり、失敗したりすることがなくなり、しっかり見過ごしたり、失敗したりすることによって人間が生活していくための大切な原動力となるのだそうです。

§ 茶道を楽しむ

毎週水曜日（裏千家活動日）の朝は一時限に空いている人達が茶室に集まり、畳を掃いて拭き掃除からはじまります。私も茶室に飾る茶花を探しながら、向かいます。あらかじめ学園の施設課の職員の了解を得ています。大学構内で季節の茶花を探します。茶花は花屋に売っていないので探すのは大変です。残念なこ

とに、大学の施設はどんどん整って来ていますが、そのぶん茶花となる和花が減って来ているようです。さて、茶室の掃除の後は、軸を掛けたり、季節にあった茶碗をだしたり、道具をそろえ、お茶をこしたりします。そうして、つくりたての季節にあったお茶菓子をもって来てくださる私たちの師、黒川ちゑ子先生をお

迎えに行きます。いつでも欲しいものが手に入るようになって、季節感が失われつつある中、私たちはこのようにして季節やさまざまな物事に敏感に反応するようになっているのです。ただ、お菓子をいただき、お茶を飲むのはでなく、前に述べたような礼儀や精神を学んでいるのです。



テニス部のこと

1. テニスというスポーツ

皆さんは、テニスというスポーツをよくご存知だと思います。

一人のプレーヤーが一本のラケットをもって、その面を利用して、黄色いボールをネットにかかったり、ラインをオーバーしないように相手コートに打ち合うゲームだ。現在、日本でもっとも人気のある代表的なスポーツである。硬式テニスが大学に取り入れられたのが一九一三年、慶応義塾大学によってだということから、大学テニスの歴史は八〇年以上に及ぶことになる。ところで、大学教育におけるテニスを考える場合に、まずテニスというスポーツの性格をご理解いただ

く必要がある。

まず、テニスは上品でなければならぬ。これはプレーヤーはもちろんのこと、そのゲームに金を払って観てやろうという観客にさえ強要される。私のように、酒を飲みながらスポーツ観戦をすることが好きな輩には、時に苦痛を感じることもさえある。私は心地よく酔いながら、伊達V S サンチェス戦を応援したいのだ。ビールにポップコーンの乗りで、「伊達ちゃんガンバツテ」とか「サンちゃんまけるなよ」とか大声で応援したいのである。しかし、その暗黙の掟を破ろうものならば、私は気が付けば有明アリーナの遙かなたに放り出されていることは間違いない。

国際経済学部助教授
テニス部顧問 下 田 健 人

プレーヤーにも、実は上品さが求められている。私は、テニス部顧問に就任すると同時に関東大学部長監督会のメンバーにもなったが（しかもどうしたものかすぐに理事に推挙されてしまった）、この部長監督会での議論を拝聴すると、「現在の色付きのハデハデのユニフォームはけしからん」ものであり、テニスのウェアは純白が基本であることを教えられる。相手に向かってガッツポーズをするなどはもつての他である。

テニスというスポーツの大きな特徴として、「孤独」がある。確かにダブルスという二人組の試合があるが、シングルスは一人対一人の勝負である。テニスは、長い試合であれば、男子の場合3時間を超える試合がある。その間ずっと一人である。一人で黙々とプレーをする。足の調子が悪かったり、背筋を痛めているので、誰か補欠と交代というわけにはいかない。最後まで一人である。しかも最後まで誰とも話をすることができない。そのため、テニスは自分で自分を管理する強いコントロールが必要である。強い自制心があれば、審判にくいついたり、相手をなじったりして

しまう。その時は、勝負に負けているのだ。

反論があるかもしれないが、テニスはスタンドプレーであり、チームはない。確かに、クラブという組織があり、誰が正選手であり、だれが補欠であるかも決まっている。しかし、チームプレーはない。これらのことは、大学教育におけるテニスを考える上で重要なことである。野球やサッカーのように、1+1が2以上の力になるということが期待しにくい。

だからこのスポーツが好きだという学生も多い。他人に気兼ねがいらない。勝ちままにプレーができる。一定のルールに従えば、あとは自分の世界を堪能できる。自分が強くなれば、強くなることがチームにもっとも貢献できると考えることができる。「FOR THE TEAM」などというウェットな考え方はこのスポーツには似合わないのだ。

2. 大学テニス

大学テニスでも、窮屈さを感じることがある。応援は基本的に拍手だけである。相手を傷つけるような野

次はもちろんのこと、自分の大学の選手に対しても指導になるような応援は制限されている。

大学テニスの場合、確かに団体戦が基本となる。もっとも代表的な公式戦は毎年4月に行われる春の関東大学リーグ戦である。公式戦は、シングルス六戦、ダブルス三戦が行われ、五試合以上取った方が勝ちである。しかし、団体戦であることはチームの共闘ということではない。サッカーや野球のように、試合の途中で選手同士が抱き合ったり、肩を叩いて励ましあったりすることはない。むしろ、チームであることによつて、個人にのしかかる精神的な負担が大きい。自分の試合を落としたがために、チームが負けてしまうことがあるからだ。

テニスとは心と戦うスポーツである。自らの精神と戦うスポーツである。皮肉なことに、テニスでポイントをとる場合の半分は、相手のミスによるものである。すなわち、相手のミスよりも自分のミスが少なければ、勝つチャンスは大きいし、逆であれば、相手が勝つ可能性が高い。つまり勝負におけるミスの占めるウ

ェートが大きい。相手のミスにつけこんでなどというのは男らしくないかもしれないが、このスポーツでは大事なことである。

同じ長時間一人で勝負を行うスポーツにゴルフがあるが、ゴルフと最大の違いはハンディキャップがないことである。インターハイクラスの選手とヘボも試合をする。その際、最初にハンデとしてワンポイントをヘボにあげるといふルールはない。容赦はないのだ。そして、あつという間に勝負が決まる。ヘボは大きな屈辱を感じる。もうやめればいいのに。

それほどまでして、自分をいじめてどうするのか。それでもテニス青年は今日もコートに向かうのだ。

3. 麗大テニス部

麗澤大学テニス部はかなり以前より活動を行っていたようである。その後紆余曲折があり、最近では、一九九〇年ごろから再び活動が活発になったと聞いている。関東大学テニス連盟では、現在、男子は七部、女子は五部のリーグに分かれているが、麗大テニス部は

男子は七部に、女子は五部に所属している。すなわち「ドベ」リーグである。上位リーグは基本的に各リーグ六つの大学から構成されているが、男子七部には約八〇校、女子五部にはなんと約一二〇校が凌ぎを削っている状況である。何故、このように少ないリーグ体制で、一番下のリーグが膨らんでしまっているかについては私の知るところではないが、私が末端リーグの大学の一人として、部長監督会の理事に推挙された背景には、このような組織の改革を期待されている点が多い。例えば、バレーボールのリーグは一〇数のリーグにわかれており、また野球も地域を中心にリーグが編成されている。「牛歩」のようではあるが、確かに組織改革は動きは始めている。

麗大テニス部の年間の活動状況は次のとおりである。

4月 関東学生リーグ戦

春季関東学生トーナメント

春季柏市民大会

5月 新入生歓迎コンパ

8月 夏季合宿（山中湖）

夏季関東学生トーナメント

10月 秋季関東学生新進戦

11月 秋季柏市民大会

12月 冬季合宿（学内）、納会

1月 初打ち

2月 4年生追い出しコンパ

春季合宿

練習は毎日行われている。授業が多く、また授業内容が厳しいこともあり、五時限（一六時三〇分〜一八時）が全体の練習時間になっている。もちろん、授業の合間をみて、各自自主的に練習を行っている。また、毎日曜日一〇時〜一六時が全体練習である。日曜日に練習を行うことが学生諸君にとってテニス部入部の際の大きなハードルになっているようだ。

日頃の練習成果もあり、女子は平成八年度の春の関東大学リーグ戦でベスト八に入り、四部昇格にもっとも近いところにいる。また男子も、秋季リーグでは予

選決勝進出を果たし、これも上位リーグへの昇格の可能性を高めてきている。

4. 宗コーチ

どんなに学生を愛し、どんなにテニスを愛してみたところで、そのクラブが強くなるとは限らない。ただ愛情が消化不良を起こすだけである。そのクラブを強くすることは、一人ひとりの選手を強くすることであり、そのためには、何よりも優れた指導者を必要とする。その意味で、麗澤大学は恵まれている。現在、麗大テニス部はコーチとして、宗中正氏にお願しているからだ。

宗氏は、一九八三年、麗澤大学を卒業した後、八四年から三年間、柏テニスクラブ専属の選手として登録され、この間、奈良国体団体ベスト八、関東オープンベスト一六などの輝かしい成績をおさめた。八六年には全日本のランキングで八〇位にランクされた。その後、八七年にはモラロジ研究所の研究員になり、上智大学の研究生として研究する。九三年よりモラロ

ジ―専攻塾の勤務となり、九六年から同塾の教務室長をつとめている。

テニス部は、事実上彼の指導のもとに動いているといっても過言ではない。この他に、大学OBの諸君が、合宿時を始め、時折指導にきてもらっている。

宗氏は、専攻塾の教務室長として何分お忙しい身上である。なかなか練習に顔を出していただけない状況である。関係諸氏のご理解をいただき、少しでも彼がコートに通える機会をつくっていただければ幸いである。

もちろん大学のスポーツ部にとってコーチの問題は常につきまわっている難題である。時間的な問題もあれば、お金の面の問題もある。例えば、宗氏の場合でも、法人の職員であるのだからコーチ料は必要ないという考え方があるかもしれないし、アマチュアだからという考え方もあるだろう。

しかし、私は基本的にこれらの考え方には反対である。教育は無料ではない。彼のコーチ料は、彼の給料には含まれていないのだ。

5. テニス部と私

私は、一九九三年四月にテニス部の顧問に就任した。本来であれば、私もテニスを指導できる立場にあればいいのであるが、私のテニスのレベルは惨澹たるものである。では、おまえは何をやっているのかといわれると困ってしまう。コンパに出て一緒に酒を飲んで、二次会のカラオケで調子に乗って、代金を少し多く払わせてもらうぐらいだ。昨年からは、夏合宿の時に大学のワゴン車の運転手になって、ボールやネットなどの機材を運搬するという役割が与えられた。麗澤教育という高い理想のもと、自分の未熟さを常に痛感している。

テニスというスポーツが上述のような性格をもって
いる限り、テニスが強くない指導者はそれほど必要と
されないと思ふ。強い者のみが教わる者の信頼を得、
リーダーとしての尊敬を得ることが出来る。顧問も
そうであるし、学生の主将もそうであろう。

では「教育」という機能はどうなるのか。ある学生
は抜群にテニスはうまいが、下級生に教えることは嫌

だというし、またそれはできないと明言する。企業社
会でも有能な技術者が必ずしも有能な管理者であると
は限らない。大学教育の一環として、この問題はもっ
とも難しい領域ではないか。残念ながら、私はこの間
に対する答えを持ち合わせていない。ただ意識ある学
生と一緒に悶えるだけだ。

ところで、強ければいいという考えが支配的になれ
ば、今後、大学内でスポーツ推薦という議論がでてく
るかもしれない。少子化が進む中、魅力ある大学づく
りに大学全体で取り組みなければならぬが、入学の
方法はその大きなテーマの一つであることは確かであ
る。いい選手をとることは強い誘惑にかられる。テニ
ス部とて同じことである。

しかし、私は、このことを考える時にいくつかの留
保的な問題を考慮する必要があると思っている。その
一つは、附属高校のことである。実は、テニスについ
てみると、麗澤高校にも、瑞浪高校にも、すばらしい
教育・指導を受けた優秀な選手たちが多くいるのだ。
だからといって、彼らをスポーツ推薦でとればいいと

いう短絡的な考えではない。スポーツ推薦云々の前に、彼らが、自らすすんで是非麗大テニス部でテニスをしたかという気持ちであるのかを重視したいのだ。

もしそうでなければ、どうしてなのか。麗澤の一貫教育の中で、彼らにとって魅力的な大学、魅力的なクラブにすることが、先決の課題だと私は考えている。



麗澤空手の伝統

空手道部部长

外国語学部中国語学科三年生 富田裕之

(1) ゼロからの出発

現在、我が麗澤大学空手道部は総勢十一名、全て一・二年生で構成されていて三・四年生はいません。

以前は四年生が主将を務め、全寮制のもと当時の先輩方は朝練・昼練・夜練と稽古に励み、大学選手権では毎年必ず優勝候補にあげられる強豪で、学内での部の幹部は学友会の主要な人事に携わり、空手道部は大学内で中心的な位置を占めていたと聞いています。その後、全寮制が崩れカリキュラムが変わって稽古する時間帯が遅くなったこともあって、部員数が減少し活動の縮小を強いられ、かつての勢いは影を潜め、一時は廃部寸前まで落ち込んだこともそう昔のことではあ

りません。今でこそ週四日の稽古には、各級の色帯びをした部員が集まって気合いの入った稽古を行い、朗報はまだお伝えできませんが、永らく出場しなかった大学選手権には復帰を果たし、年二回強化合宿も行っています。

存続が危ぶまれた時、指導者のないまま時には一人で稽古され、瀕死の空手道部を延命して下さった先輩には、日々感謝の気持ちを忘れずにいます。現在は、麗澤高校教諭の野中道男先生、西野徹先生の両氏をコーチとして迎え、忙しい合間をぬって指導していただいています。両先生は麗澤高校空手道部の顧問もしておられるので、時間の都合がつかない時が多く、指

導者のいない時には自分達でメニューを考えます。

しかし現在は三・四年生の部員がいない為、学生だけの日は二年生が最上級生として率先して稽古を進め、新入部員へ基本の立ち方や型などの技術指導も行いますが、二年生全員が初心者から空手道を始めたため、応用練習よりも反復練習の数を増やす稽古が中心となります。一日の稽古はまず体操・軽いランニングにはじまり、十分にストレッチをし、道場正面に礼をしてはじめます。はじめに基本の技の反復練習をし、それから型や組手の稽古に入り、補強運動をして、最後に礼をし終わります。

現在の空手道部は以前より規模が縮小し、稽古の間も減り部員の多くを女子部員が占め、かなり様子が変わりましたが、かつての『麗澤空手』の伝統を引き継ぐべく再起への道を模索し始めたのです。

(2) 空手道部らしくない麗澤空手道部

自分が入部して半年を過ぎたころ、電車の中で偶然予備校時代の友人と再会し、とりとめもない話からや

がてお互いの大学の話になり、聞いてみると彼もなんと大学に入って空手道の門を叩いたということなので、自分もだと相槌をうつ前に少し他校の様子を聞くかと思って「上下関係とか厳しいの？」と聞いてみると彼は少し誇らしげに話し始めました。

それによると彼の大学では、先輩が豆粒ほどに見えたころから下級生は近寄って行って荷物を持ち、飲み会の席では駅から居酒屋までの両端にガクランを着て整列して先輩を出迎え、店内では壁際に立ったままで常に先輩達のグラスや仕草に目を配り、飲めと言われるまで酒を口にしてはいけないそうで、最後に彼は興味津々で話を聞いている自分にむかって「大学の空手部なんてどこもこんなもんだよ」と言いました。

結局自分も空手をやっているのと打ち明ける前に彼は別れたが、彼がそのような古風な厳しい体育会系を経験したかったならまだしも、空手道の格闘術や武道性、正しい礼や躰などを身につける為に入部したのだとしたら、彼は余分な習慣や規則に縛られすぎではないだろうか？という考えが私の脳裏をかすめました。

なぜなら先輩に敬意を払うことや規律は確かに必要ではあるが、ゆとりのある上下関係でも、はじめさえついでいけば十分に敬意を払えるし、その方がもっと空手道に対する向上心も湧くはずだと彼の話を聞いた後思い、我が麗大空手道部の伝統に対して誇らしきと感謝の気持ちがこみ上げてきました。

(3) 麗澤大空手道部の伝統

自分が麗大空手道部に入部してから、空手道を学ぶ上で恵まれていると思ったことは、テニスコート1面分くらいある広い武道館や無償で我々を指導して下さる一線で活躍されているOB・先生方の他に、創部当時から受け継がれる麗大空手道部独特のけじめがあり、なおかつアットホームな伝統的雰囲気があることでした。OBの諸先輩方などは練習前は後輩や仲間と楽しく談笑していても、道着を着て礼をすれば稽古中は決して歯を見せず、一二〇%空手道に集中し、組手の稽古となれば先輩、後輩一切関係なしでどうにかして一発たたき込んでやろうと目をギラギラさせて向か

い合います。気の抜くことのない厳しい稽古も終われば、先輩も後輩に権威など振りかざさず、後輩も敬意を払いながらも先輩達と交流しており、OB会などでは皆多忙な仕事の合間をぬったり、遠方からはるばる来て、先輩、後輩と会うことを楽しみにして集まります。聞くところによると、他大学の空手道部では現役時代にした思いが原因となって、卒業したらあの先輩だけには二度と会いたくないなどということがあるようです。稽古中以外の先輩後輩の縦のつながりがあるまらないことが原因ではないかと思いますが、それに比べ麗大空手道部は伝統的に先輩後輩皆仲が良く、競い励まし合いながら長く険しい空手の道を追求しているため、空手道の楽しさを実感することができます。又卒業後も空手道が続ける方が多く、現在の空手道部もこのような伝統をよく受け継いでいます。

(4) 麗大空手道部で得るものとは

最後に、先日ある稽古納めの会の席上である先輩が「空手の技が一生のうちで活かされることはできれば

ないほうがいい。どうしても活かされる時とは、自分

の大切な家族や友人など、何としても譲れないものを
守るときだけでいい。」と言われたことがありました。
確かに空手道は実戦性のある格闘技であり、折角血の
にじむような稽古をしても実践でもっと役立てないと
意味がないと考える人もいます。空手道と
は「心・技・体」の全てを鍛えるものであり、血気の
勇を戒められないようではたとえ技を体得したとして
も、心が伴ってないので、空手道を極めたとは言えな
いと思うのです。空手道で培った精神力、それは自分
との戦いに耐えてこそ得られるもので、後に社会や自
分の人生での大きな支えになるものであると言えま

す。

麗大空手道部と青春を共にされた先輩方の共通点、
それはとても生き生きとしていて若々しいことです。
先輩方は皆、麗大空手道部で培った精神力・忍耐力で
自身の人生を切り開かれ、生涯を通じて空手の道を追
い求める力を麗大空手道部で得たのだと思います。

麗大空手道部と共に大学生活を過ごした学生、その
人はきつと鍛えぬいた技、厳しい環境に負けぬ体力、
そして耐えて忍ぶ心技体の他に、生涯の指針となる道
しるべを教えてくれる麗大空手道部の同胞という貴重
な財産を得ることと思います。



サッカー部の夢

サッカー部元主将

外国語学部英語学科四年生 北川 靖

十月六日、私達は、今季千葉県大学リーグ予選の天王山と呼べる試合に臨んでいた。相手は帝京平成大学、二年前ならば軽く一蹴できる相手だった。この試合に勝てば決勝リーグ進出、負ければ予選敗退という場面だった。結果は0対3、完敗だった。その瞬間、私達麗澤大学サッカー部の一部昇格という長年の目標が今年もついでなことになった。今季の成績は予選三勝二敗一引分け、順位決定リーグ三勝0敗、総合五位であった。

私が入学してから、ここ三年間のサッカー部の成績を振り返ってみると、一年目二部総合一位、入れ替え戦敗退、二年目二部総合五位、そして昨季二部総合五

位と三年前に較べここ二年間低迷していることが分かります。特に昨季は二部の上位校との力の差をまざまざと感じさせられるシーズンでした。三年前予選、決勝リーグを通じて一敗もなかったチームがなぜこのように急速に力を落としてしまったのか、その原因を探ると、現在大学の部活動、特に運動部系の抱えるいくつかの課題が浮かび上がってくるように思われます。

私は、この場を借りて、私の考えうる課題とそれに対するの解決法について考えてみようと思います。

課題その一―活動時間、場所の制約

麗澤大学の教育内容は素晴らしい教授陣に支えられ非常に充実しています。私（英語学科）の例をとってみると、一年目から三年目まで一週間に平均し約15コマ程度の授業があります。その授業内容は多くの分野にわたりまた密度の濃いものとなっています。他の学部の学生の話聞いても非常に高度な授業、研究をしているようです。授業は曜日によっては、午後六時まで続きます。しかしこの充実したカリキュラムのために部活動の活動時間が、平日は六時以降に制約されてしまうことも事実です。午後六時以降になると外は暗くなってしまう、外での練習は不可能になってしまいます。昨季のサッカー部の活動時間・場所は、火・水曜日は午後六時半から体育館で、比較的部員の授業の少ない木曜日は午後三時からグラウンドで、そして土、日曜日は午前中グラウンドで行われました。

特にサッカーのようにチームプレー、フォーメーションプレーを重視するスポーツにおいては、チーム全体として練習することは絶対条件で、全員が揃わない

と効果的な練習成果を上げることができません。私達の場合、木曜日は半数程度の人数しか集まれないため、グラウンドを使用しての全体練習は土、日の二日間に限られ、残りは狭い体育館の中で行うことを余儀なくされてきました。このような活動時間、場所の制約は私達にとって非常に大きな課題でした。

この課題の対策として私達のできることは、その短い時間、限られた場所の中で、集中して効率良く練習をすることであろうと思います。狭い体育館の中でどれだけ実戦に近い状況を作りだしイメージすることができるか、短いグラウンドでの練習時間いかに集中しプレーすることができるか、ということが私達には必要とされていると思います。しかしここで新たな課題が浮かび上がってくるのです。

課題その二―指導者の不在

制約された時間の中でいかに効果的な練習をし、またチームを強くするかということ考えた時、私自身、昨季は自分の能力の限界を感じずにはいられませ

んでした。現在大学の部活動のほとんどが指導者不在の学生主導で活動しています。昨季のサッカー部もその例にもれず指導者不在で、主将の私を中心となり活動していました。どのような戦術で戦い、どのような練習を取り入れるのかということ、私は主将の立場から部員に指導しなければなりませんし、またコーチの役割も果たさなければならなかったのですが、しかし私は主将、コーチである以前に、当然一人のプレーヤー、部員として、皆と平等の立場に居るのですから、そこに問題が生まれました。数名の部員と共にチームの特徴を考え、それに合った戦術を決定し、他の部員に指導するのですが、私は戦術の専門家でもまた指導の専門家でもない、本当にこの戦術、練習方法で正しいのだろうか、と不安になることも多かったのです。指導している本人が不安なのですから、当然指導される部員も不安であったに違いありません。練習試合で良い結果を出せなかったり公式戦で負ける度に、各部員から様々な意見、主張が生まれました。たとえば部員全体で戦術を考えたとしても、様々な意見を一つ

にまとめ意志の統一を図ることは不可能だったであろうと思います。結局問題は各個人が自分の主張を持っていても、絶対的な力を持った指導者の不在により、誰もその主張が正しいかどうかということ判断できないということなのです。私はチーム作りの上で絶対的な力を持った指導者が必要だということを感じさせられました。

実は二年前のシーズン、大学の協力を受け、指導者を招いて指揮を執っていたことがありました。その結果、指導方法を巡り部員との間に亀裂が生じ、チーム全体の士気が低下し、よい成績を残すことが出来ませんでした。しかし、その当時のチームを振り返ってみると、こと戦術に関しては指導者によってしっかりと教え込まれていた、皆統一された一つの戦術眼を持って試合に臨んでいたと思います。成績こそ昨年と同じであったのですが、チームの完成度は彼の作ったチームの方がはるかに高かったと思われます。

第三の課題―部活動に対する意識の低さ

三年間サッカー部に在籍して、また一年間主将を務めて、一番頭を悩ませたのが部員の部活動に対する意識の違いでした。部員の中には常に勝利を目指す者もあれば、サークル的楽しみを求める者もいました。そして、部活動が年々サークル的になっていくことを感じました。私は部活動とは、大学から援助を受け大学の名前を背負って活動している以上、常に上を目指すべきだと思います。また常に勝利を目指して練習し、試合に臨むということがサッカー部の目標として掲げられていました。しかし実際には、部活動とサークルの中間的性格を持ってしまっています。二年前、指導者を招いていただいた時うまくいかなかったのは、このような部員のサークル的志向にあったと思います。彼は、体育会系運動部の要素である礼儀、厳しい練習などを指導しようとしたが、体育会的土壌のできていない私達にとっては、それらは受け入れ難い物でした。意識の低い部員は退部して行きました。結局十人程度の部員が退部しました。

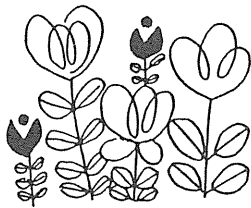
このようなサークル的性格を持つ部活動になってしまう理由には、大学の規模の小ささが挙げられると思います。学生の数が少なく、特に男子学生の数が少ないために、いわばピラミッドの底面が狭いために、高い意識を持った学生の数が本当に少なくなってしまうのです。そのためサッカー部のようにある程度の部員数を必要とする部活動は、どうしても意識の高さを少し下げなければなりません。このため先に挙げた中途半端な部活動が生まれてしまうのです。

これらの課題に対して私達がやらなければならない事は、入部してきた部員の意識改革だと思っています。大学では春休みに、新主将、部員を集めてリーダーセミナーを主催しており、その中で新部長達はチームを率いる上でのリーダーの資質について学び、同時に部活動の重要さを学びます。このような企画を部員の意識改革をするために実施することは非常に有効だと思います。私は昨季主将を務めると共に、部長会の議長も務めさせていただきましたが、自分の部活の事しか見えず、部活動全体を見渡し活動することはできなかつ

たと思います。

今後の部長会には、部活動全体の意識改革を含めた総合的な役割を必要とされると思います。そのため、文化系、体育系連絡会を設立するなど組織の細分化を図り、部長会自体の改革が必要とされるかもしれません。

今まで挙げてきた課題は、私のサッカー部での経験に基づいて挙げられたものですが、多かれ少なかれ他の部活動にもあてはまる課題ではないかと思っています。後輩達には決して現状に甘んじず常に上を目指す向上心を持ってもらいたいと望みます。



スポーツを通じて学んだこと

バスケットボール部元部長

国際経済学部経営学科四年生

石井 貴

平成四年八月、全国高校野球選手権大会において、私の母校である明德義塾高校は、優勝候補の一角であった強豪・星陵高校と対戦した。その時明德義塾は、

当時高校屈指のスラッガーといわれた星陵の四番打者・松井選手に対して、走者無しの場面でも勝負をしない五連続敬遠という徹底的な作戦をとった。結局試合は三対二で明德義塾の勝利に終わった。その夜のテレビニュースを皮切りに各メディアは、「高校生らしくない」「アンフェアだ」等の非難、酷評を明德義塾ナイロンに浴びせた。宿舎には心無い高校野球ファンからの、嫌がらせの電話、手紙が殺到し、世間の注目を集めた大事件となった。この時私にとって一番印象に残

ったのは、明德義塾の馬淵監督の「勝利至上主義ではないですが……」という言葉であった。

それから四年後の春の選抜高校野球選手権大会に出場した、帝京高校の前田監督にも非難が集中した。東京都の予選大会で、投手の調整登板のためコールド勝ちを嫌って、ヒットが出ても三塁走者を還らせなかったり、相手野手の体目掛けたスライディングや、極端に小刻みな投手継投などの作戦が高校生らしくないと叩かれた。高校生らしい、らしくないということは別に、二人の監督に共通していえることは「野球は勝負」であり、「勝つためにはなりふり構っていられない」ということではないだろうか。

大学スポーツ界においても同じような傾向がある。冬の花形スポーツであるラグビーにしても駅伝にしても、近年留学生と称した強力な助っ人を擁しての試合が増えてきた。

学生スポーツにおいての基本理念は、教育であるとはよくいわれる。しかしスポーツという以上、相手より勝っていなければいけない。とすれば学生スポーツといえども真剣勝負なのだ。いや、学生だからこそ真剣勝負であるともいえる。そういうことを考えると、五連続敬遠や留学生制度も避けては通れない道なのかもしれない。

教育という立場からしてみると文武両道が一番好ましいと思われるが、スポーツを選択した場合どうしても勉強する時間の割合が少なくなってしまう。そういう人達が全く勉強していないというわけではないが、その時間を削りに削って自分自身の限界に挑戦している人間の集まりが、オリンピック、ユニバーシアード、世界選手権などである。国の代表となつて、自分の使命のために一瞬の集中力を発揮する姿は、人々の感動

を呼び、時には涙することさえある。

人間に与えられた能力を最大限に引き出すという分野であるスポーツは確かに素晴らしい。しかしそこで私は考えたい。スポーツ一辺倒で本当にいいのだろうか。

私は昭和六三年、全寮制の明德義塾中学校入学と同時に、バスケットボールを始めた。そのまま明德義塾高校に進学した。中学・高校の時の最高成績は、県大会でベスト四だった。スポーツの強豪校として名高い我が校にとつて、バスケットボール部はいわばお荷物クラブであった。それでも高校三年生の時に、高知県国体少年チームの候補選手として最終選考まで残った。結局選考には漏れてしまったが、その時はバスケットボールの強い大学に進学して、あわよくば実業団に入ってバスケットボールを続けることができるという頭があり、「一度しかない人生だ。好きなことをしたい」と思っていた。今考えてみると、インターハイはおろか四国大会にさえも出場していない選手に声がかかるわけがない。親の反対は当然のように

あり、担任の先生からも「考え直せ」といわれ、結局バスケットボールを諦めて、推薦枠のあった麗澤大学に入学することになった。

大学入学後、私はバスケットボール部に入部し、再びのめりこんだ。監督はいなかったが、素晴らしい先輩方や頼りになる同級生、元氣いっぱいの後輩達にめぐりあうことができた。授業の関係もあり、週に三回、二時間ずつの練習が精一杯の状態だが、どこでもバスケットボールはできるんだという強い自信を持つことができた。そして私も三年生に進級し、主将という大役を任されることとなった。三年生になると同時に専門研究科目が始まり、忙しい毎日が過ぎていった。部活動と勉強の両立は確かに大変だと思う。しかし麗澤大学では、部活動を頑張るためには勉強も同じように頑張らなくてはいけない。大変だと思ふ反面、小学生が「遊びに行く前に宿題してから」と母親にいわれるような相乗効果のようにも思えた。そうして過ごすうちに、関東男子学生バスケットボールリーグ戦を迎えた。この通称「関東リーグ」は九月の初めから

十月の半ばまで行われる大会で、各大学はこの大会に照準を絞ってチームを仕上げてくるのである。

我が麗澤大学は九部リーグ（一〜九部に分かれている）で、リーグ戦七戦全勝、決勝戦、入替戦と勝ち抜き、来年度八部昇格の切符を見事手中に収めた。関東学生連盟に加盟して三年、関東リーグ三年目で初の栄冠だ。九部という下位リーグではあるけれども、出場一―二校中九校しか味わえないこの感動はなにもにも代え難い。これも日頃の練習の成果と、バスケットボール部を支えてくれた方々、大学学生課の方々のご尽力の賜物である。リーグ戦の大半を麗澤大学の体育館でできたことは、非常に心強いことであった。

八部昇格を決めた時に私は思った。「もしバスケットボールを続けたくて強豪校に入学していれば、メンバーにさえ入ってないかもしれない。もしかするともうバスケットボールをやめていたかもしれない。そう考えると勉強と部活動の両立は大変だが、主将として試合にも出させてもらい、最高の仲間と共にこの喜びを味わえたんだ。これほどの充実感は一生の財産

になる。今現在では確かに上のレベルで試合をするこ
とはないが、実業団だけが、強い大学だけがバスケッ
トボールをしているんじゃない。少ない人数でも、監
督がいなくても皆の力をひとつにすれば立派にやって
いけるじゃないか。」そう思うと自然に涙が流れてい
った。

最初に私はスポーツは真剣勝負であるといったが、
その考えは今後も変わらないだろう。地上三・〇五メー
トルの輪の中にボールを投げ入れ続けたこの九年で学
んだことはたくさんある。勝つことはもちろん重要だ
が、負けることから生まれる大切なことも見逃しては
いけない。チームスポーツにしても個人スポーツにし
ても、心をひとつに集中させる力をいつでも発揮でき
る強い精神力が一番大切だと考えている。そして最終
目標としては立派な人間になることだと思う。人間が
能力の限界に挑戦するのならば、力の限りのことをし

て欲しい。結果はどうであれ、その過程にどれだけ自
分という人間を磨きあげたかが、次世代への手本とな
るだろうし、次の価値の創造にも繋がっていくのだと
思う。

麗澤大学に入ったからこそ味わえたこの感動。後輩
達に何を残し、そして何を伝えていって欲しいのか。
四年生となる平成九年、やるべき仕事は学生最後の総
仕上げともなる。悔いのない集大成を作り上げていき
たい。

今年の麗澤大学バスケットボール部も前進あるのみ
です。

最後にこの原稿を依頼して下さった水野先生をはじ
め、学生課の皆様、諫山先生、佐藤先生、家族や友人、
そしてバスケットボール部の皆にも感謝の言葉をいい
たいと思います。

ありがとうございました。

道徳科学への想い

国際経済学部非常勤講師 玉井

哲あきら

素朴な疑問

経済学部の学生が、「経済活動においての最大の目的は利益を挙げることにある」という文章を書いてきた。この表現にそんなに異和感はないのであるが、何か腑に落ちないものを感じるのは私一人の感覚なのであろうか。大学で経済学を学ぶ学生が、そのような現実的な利潤の追求ということに関心をもって見ているのかという驚きでもある。

そんな不安をいだきながら岩波の『経済学辞典』を引いてみた。そこには「経済学とは富の再生産過程をその社会的側面において分析する学問」と定義されていた。うまい定義だなと感じつつも、ここでも私の考

えとは違うことに気づかされた。経済学は物の流れを客観的に分析することを中心課題にすえているようで、どのような目的で分析するのか、その主体的意味を問うものではないという性格に満足せざるを得なかった。

政治学であれ、経済学であれ、私のいづく学問とは、個々の専門領域に携わりながら、そこで関わってくる個々の人間から、社会・国家・自然・地球全体に配慮しつつ、全体の共存と繁栄維持に向けての道を開明すること（これを真理の究明といってもいい）が目的であると考えている。したがって経済活動そのものも、富の公正な交換と分配を実現することによって、人々

の安心と平和の実現に寄与するとともに、宇宙自然と調和するものでなければならぬという想いがある。

今日の経済は、自滅的な単調発展型の経済システムに基づき、資源は使い尽くし、環境は破壊し尽くすシステムで、このシステムを維持しなければ社会・国家の発展はありえないという前提で走り続けている。食糧問題、人口問題、環境問題、オゾン層の問題、高齢社会の問題、家庭崩壊の問題、生命倫理の問題、いじめの問題など、どれもが経済学の研究領域と深い関係をもっている。もちろん経済活動が人間の欲求をより大きく実現するという人間の夢を実現している訳であるから、経済学だけが悪者にされる筋合いはないとも言えようが、この現在の経済システムに、根本的なところからメスを入れるのが本来の学問の使命ではないかと思うのであるがどうであろうか。

世俗化した大学

本来の大学は、大・中・小の企業へ企業戦士（卒業生）を送り出し、その成果を競っているだけの教育産

業にとどまるものではない。次の世代を担う学生たちに、地球の未来を考え、夢と使命感を持って、上記諸問題の解決に挑戦するに足るだけの基礎的な心構えと能力を育てることを使命としている。

しかし現実の大学は、構内や教室内のゴミの問題から、タバコのポイ捨て、授業中の私語の問題など、極めて基本的な生活態度からして問題である。先の最先端の課題に取り組み、学生たちと次代の問題に挑戦していくという高度な課題は、このような態度の学生たちとの学びの中から実現するのであるか。

今日の大学は、人文科学から社会科学、自然科学まで、それぞれが専門の知識を後進の学生たちに伝えることで満足してはならない。所有することで満足する知、技術開発に役立つ知を獲得することで満足するのでは、「知は力なり」（ベーコン）という人間の傲慢への道を推進していく拠点と化してしまいう。

● 態度知としての道徳科学

そのような中で、道徳科学は今日の知の物質化・所有化・技術化・権力化に対して挑戦しようとしていると言いたい。一般に、知識はそれを持つことによって自分の欲求をより大きく実現することをめざす手段と考えられるのであるが、道徳科学の知は、持つことに本来の意味があるのではなく、持つことが本人の生きる態度、社会・国家・世界の平和にむけて関わっている情熱や態度につながっていくような、人間形成を視点とした態度知を目指していると言えよう。

このような性格を持つ道徳科学は、世に言う専門学とも違う特質を持っている。その特徴を倫理学と比較してみると、今日、倫理学も科学・技術者の倫理、医の倫理、生命倫理、環境倫理、政治倫理、企業倫理などと職業倫理が問題とされるようになって、倫理学も専門学的な性格を余儀なくされているように見える。しかしその実、学としての専門化が進めば進むほど、自らが主体的によりよく生きるという倫理学本来の課題から離れ、現実のまたは予想されるさまざまな条件

の中で、考え、判断し、生きるための知識を提示することに学の性格がシフトしているように見える。このように倫理学も、所有知・技術知を問題にしていると思えるのである。

学生たちは、「私はこの学部に在籍し勉強してある程度の専門知識は得られます。しかし、その知識の用い方に私の人間性が問われると思うのです」とか、「自分の利益ばかり追求していくような人間はこれからのビジネスにはついていけなくなる時代が来る。そのような時代をリードしていく道徳観念を持った人間こそがこれからの新たな経済システムを作り、人類を守り、地球を救うと思います。そして僕たちこそがその人間にならなくてはならないのだと思います。」と書いてきている。

ここには、自分の生きる態度、人生目標、および人類の課題に挑戦しようとする学生たちの主体的な態度が表明されている。このような態度知へと学生たちとともに歩んでいきたいわけであるが、この態度知への覚醒は、ひとり道徳科学の担当者だけで実現できる課

題ではない。本学全体の課題でもあろう。

対話のある大学

麗澤大学は、創立者廣池千九郎の精神を基礎としている。その基本的な考えは、道徳科学と外国語の教育を、あらゆる学問（経済学、経営学も含まれるのであるが）の基礎学として位置づけることにあったとうかがっている。その考えをもとに現実の経済活動の理念として提示されているのが、道徳と経済の一体化（道経一体）の思想である。

しかし、この道徳と経済の一体化とは、どちらか一方を修めれば必然的に他方と一つになるという性格の

ものではない。個々の人間が両者を修め、自己の中で統合一体のものとして体現していく人を育てていくという大きな理念をうたいあげたものである。したがってその実現のためには、両者を担当する教授間の密接な相互研鑽が不可決となって来る。その真摯な姿が学生たちに浸透し、本学全体に、師弟同行、ともに所有知と態度知を磨いていく雰囲気が育っていくことを期待したい。

そのためにも、道徳科学と外国語と経済学の担当者が、三位一体的に対話・研究交流をより一層実現することが望まれる。これが本学の特質となり、他の大学にも浸透していくことを期待したい。



慣習的道德について思うこと

外国語学部教授 岩佐信道

一、学生に投げかけた質問

教職科目の一つである「道德教育の研究」の平成八年度後期の何回目かの授業でのことであった。この年は、例年一方的に説明してきた内容を、学生の関心を喚起するために、初めて、学生に問題を投げかける形でありあげたのであった。私は、まず次のような質問をした。「次のAとB、二つの考え方のうち、どちらがレベルの高い考えと思うか。それとも、両者に優劣はつけられないと考えるか」と。

まず、Aの考え方は、次のようなものである。人間の行動において重要なことは、社会の法や秩序を尊重することである。各人は、社会の一員として、生活

しているのであって、自分の属する社会を全体として維持発展させるためには、自分の社会的義務を果たすことが大切であり、「もし自分と同じことを皆がしたとして、それでも社会は維持できるか」というように、物事を社会全体の中で考えることが重要である、とすぐる考え方である。

これに対して、Bの考え方は、全体としての社会よりも、個々の人間に焦点を当て、物事を、各人が実際に結ばれあっている個々の人間関係の中で考える考え方である。つまり、人間関係の中で何が自分に期待されているかを考え、相手に対する善意と思いやりをもって行動することが大切であり、信頼、忠誠、尊敬、

感謝といった価値が重要である、とする考え方である。

私は、このA、B二つの考え方の要点を説明した上で、この二つの考え方（もしくはそれに類似した考え方）が、対比的に出てくる場面を二つ、補足説明として付け加えた。一つは、『論語』の中の次のような一節である。

葉公、孔子に語りて曰く、吾が黨に直躬なる者あり。

その父羊を壊めり。しこうして子これを證すと。孔子曰く、吾が黨の直き者は、これに異なり、父は子のために隠し、子は父のために隠す。直きことその中にありと。

右のBの考え方における人間関係は、必ずしも親子関係に限られるわけではないが、『論語』のこの箇所では、その一例としての親子関係が論じられている。葉公が、羊を盗んだ父親の罪を公にした息子の行為を、自分一個の親子関係よりも、社会の一員として、社会の法と秩序に対する責任を優先させる考えとして、称賛しているのは、右のAの考え方に近いのに対して、

孔子が、その葉公の考えを批判し、親子関係は、通常の社会的責任を超えたものであるということを示唆しているのは、少なくとも、表面的には、Bの考え方に似通ったところがあると述べたのである。

次に、本学の創立者、廣池千九郎が『道德科学の論文』で触れているグレイブズの『中国生活四十年』の中の、

われわれ（西洋人）は正義を標準とするのに、中国人は人間性を標準とする。われわれは『正しいか』
といい、中国人は『親切か』という。

という文章を紹介し、AとBの考え方の違いが、西洋人と中国人の考え方の違いという角度からもとらえることができることを示唆したのである。なぜなら、このグレイブズの指摘するように、もし中国人が、概して「親切であるか」を問うとすれば、彼らは、個々の人間関係において、相手の状況や必要に応じて、思いやりのある行動であるかどうかを問題にしているのに対して、西洋人は、個々の人間関係を超えた一定の基準（たとえば、社会に受け入れられている法など）を

想定し、それに照らして物事を判断しているということを示唆しているからである。

二、学生の反応

この時、教室には、二年生と三年生を主体とする三十名近い学生がいたように思う。私のこのような問いかけは、ただその日の講義内容を学生に積極的に受け止めてもらいたいと思つてのことであつたために、残念ながら、学生の反応について正確な数を数えることはしなかつた。しかし、私の記憶するかぎり、全体のおよそ三分の二の学生は、「(人間関係を中心に考える) Bの方が、(社会的視点を重視する) Aよりすぐれている」とし、残りの三分の一のうち、四、五名は、「Aの方が、Bよりすぐれている」とし、残る数名は、「AとBの間に、優劣はない」と答えたように思う。

このような結果、中でも、Bの考えをAの考えより高いと考える学生が圧倒的に多いという結果は、私にとっては、かなり意外なものであつた。なぜなら、この日の私の授業の目標は、道德問題に関する人々の思

考には、發達の段階があるというコールバーグの理論を説明しようとしていたからであり、しかもその理論によれば、Aの考え方は、Bの考え方より發達の高い段階のものとされているからである。(勿論、このような学生の反応に、補足説明の中の孔子の見解が影響しているかもしれない。そして、厳密に言えば、孔子の見解が、ここでのBの考え方と必ずしも同じではないということに関しては、『麗澤大学紀要第63号』で論じたことがある。)

三、道德性の發達段階と学生の反応の意味するもの

このコールバーグの道德性發達理論は、道德教育を考える授業では、やはりふれておかなければならない理論である。コールバーグは、廣池学園の創立五〇年にあたる一九八五年に来園した。学内での一週間にわたる講演会等には、全国の大学から道德教育関係の研究者が多数集まつたのであつた。コールバーグによれば、道德教育の基本は、社会の特定の価値観を子どもに注入するのではなく、文化の違いを超えて普遍的な

プロセスとしての道徳性の発達を促すことである。ちなみに、その理論では、人間の道徳性の発達には、一段階から六段階までの区別があり、右のA、Bの区別は、多少説明を簡略化しているとはいえ、Bの考え方は、その第三段階に、Aの考え方は、第四段階にあたるものなのである。そして、私は、右のような質問をすることによって、学生に、この第三段階と第四段階についてじっくり考える機会を与え、さらに、その前後の一、二段階および五、六段階についても興味をもつて受け止めてもらいたいと考えたのであった。

勿論、コールバーグの理論をどう評価するかについては、さまざまな見解がある。この第三段階（Bの考え方）と第四段階（Aの考え方）に関しては、かつてキャロル・ギリガンが、第四段階の思考が多い男性に比べ、女性の思考には、第三段階が多く見られ、結果的に、女性の発達段階は、男性に比べて低く評定されがちであるということを指摘したことがあった。つまり、男性は、物事を社会的視点からとらえる傾向があるのに対して、女性は、物事を人間関係の中でとらえ、

「親切であるかどうか」を問題にすることが多いが、これは果たして女性の道徳性が男性に劣っていることを意味しているのか、という鋭い問題提起であった。この第三段階と第四段階に関する性差は、たえず取り上げられる問題であるが、私のクラスの学生たちの大多数が、第三段階的思考を第四段階的なものより高いとしたことは、どのように考えればよいのであろうか。

この点に関しては、まず、そのような結果は、その大多数の学生が、まさに第三段階にあることを物語っている、という見解が成り立つであろう。たしかに、コールバーグ理論に基づく簡便な発達段階評定法として、各段階の代表的な考えを羅列したもののなかから最も適切と思う考えを選び出させ、その選ばれた考え方がどの段階のものであるかによって、その人の段階を決定する方法がある。その意味からすれば、第三段階的なものを高く評価する学生たちは、彼ら自身、第三段階に属しているのだ、と考えることもできる。事実、学生たちの多くは、もし厳密な評定を行ったとしても、おそらく第三段階と評定されるのではないかと

思われる。

しかし、学生たちのこの反応を、第三段階（人間関係中心）と第四段階（社会的責任中心）の道徳的思考が、人々の実際の行動と結びつく程度の違いという角度からとらえることも可能ではないであろうか。

確かに、個々の人間よりもはるかに抽象的な社会というものの存在を認め、その社会の一員としての責任を考える思考は、具体的な人間関係の中で、相手に対する思いやりを重視する思考よりも、知的には高度な働きを含んでいるといえるかもしれない。しかし、第四段階の思考（Aの考え方）は、その高い抽象性もあって、必ずしも人間の行動に直結せず、むしろ人々の実際の行動は、その発言に見られるその思考を裏切っているということが多いからではないであろうか。

分かりやすく言えば、学生たちが現実社会の観察から、「社会に対する責任」を口にする人は、口先だけの場合が多く、逆に、「人に対する親切」を口にする人は、実際にそれを実行している人が多い、というよう

に認識していることの現れかもしれないのである。

事実、現実の社会では、社会的に責任ある人々の犯罪や無責任な行動が毎日のように報道されている。学生ばかりでなく、大人も含めて、私たちは、そのこととうんざりさせられているというのが実情である。

ただ、その結果として、私たちが、物事を、具体的な人間関係の中だけで問題にし、「相手や仲間に関心にする」ことだけが大事であると考えるとすれば、そして、物事をさまざまな範囲の社会全体の在り方の中で考えることをせず、またそのような態度を軽んじるとすれば、それこそ、私たちにとって極めて深刻な問題をはらんでいるといわなければならない。

道徳性の発達理論においては、第三段階と第四段階は、あわせて「慣習的レベル」と呼ばれ、その後に、「慣習以後のレベル」としての第五段階と第六段階が続くとされている。しかし、社会における現実の行動を考える時、私たち日本人にとって、この第四段階こそ、当面する大きな課題といえるように思う。

麗澤大学における人間教育

—一九九六年度道德科学の授業を省みて—

外国語学部教授 黒川 洋

一 はじめに

昨年暮れ、本学創立者にかかわる「廣池千九郎記念館」を、短時間ではありましたが例年のように学生と共に見学しました。その時の「感想カード」では、「感動した」「素晴らしい方」「麗澤大学に学べることを誇りに思う」など積極的な感想・意見が八割余にも達し、予想以上の反応に喜んでいました。ところが、翌一月二〇日、授業の最終回において実施した「〔無記名式アンケート〕道德科学の授業を振り返って」では、それとは全く逆の結果がでました。授業に意義を見いだしている学生はせいぜい三割前後程度に過ぎないことが

わかり、近年最低の結果でした。それは、何故だろうか。典型的と思われる一昨年のほぼ同様のアンケート結果と比較してその原因を分析するのが、本稿執筆の一つのきっかけとなりました（昨年度分は最終回での欠席者が多く、その結果の紹介は省略します）。

ご承知のように、麗澤大学では外国語や経済などの実学的知識とともに、それらを活かす根本ともいえるべき人間の「品性」にかかわる重要な要諦として、「建学の精神」を何とかして学生に学んでもらいたいと創立以来一貫して念願し、苦心しながら努力を続け今日に至っています。

本稿では、私の担当している「道德科学Ⅱ」の授業

の実施状況の概略を報告し、その現時点での反省点と改善策の提案を述べ、皆様のご批判・ご助言を得たいと思えます。

二、「道徳科学Ⅱ」の授業の実施状況の概略

外国語学部における「道徳科学ⅠⅡ」の授業は、在学四年間の中、一学年（昨年までは二学年）時に毎週一コマ（九〇分授業）の年間履修が必修科目としてその受講が義務付けられています。本年度は一クラス約六〇名余の規模のクラスを、それぞれ七名の教師で担当しています。毎年創意工夫をこらしながら、授業内容・方法共に改善を試みてきているにもかかわらず、毎年幾つかの新しい要因が重なってか、残念ながらその成果は一進一退というのが現況であります。抜本的な対策を講ずべき時期に来ているものと思えます。

「品性の教育人間学」ともいうべき「道徳科学（モラロジー）」を、人生経験の比較的乏しい若い学生にどう教え、どのようにしたら喜んでそれを活かしてもらえるようにするかは、通常の授業科目を教えるのとはま

違った困難があるのは当然のことでありましょう。私の場合、毎回授業の終りに必ず授業についての感想や批判や問題提起などの「カード」を記名式ではありませんが書かせ、教師の反省のためのフィードバック情報を得、軌道修正をしながら授業を進めるよう心掛けてきました。また、年度末には、前述のように「無記名式アンケート」を実施し、総合的な反省点や組織的改善策を模索しています。

私の授業のねらいは、地球環境破壊や戦争さらには家庭の崩壊など現代の根本問題が、私たちの「品性」特にその「独善性」に起因するのではなからうか、私たちの「信念」と「独善性」のその逆説的ともいえるべきか「などを共に考え、自他をとらえ直すことをめざしています。授業のやり方は、予め配付した文献資料を宿題として読ませその予備知識の上に、前回の授業の補足講義や当日分の簡単な解説の後、ビデオ教材をみせ、毎回約二問位の質問に「カード」で答えさせる形式を採用しています（この「カード」は、「出席

カード」兼用ともしています)。

なお、「品性の教育人間学」としての「道徳科学(モラロジー)」の概略については付一を、「道徳科学2」の「授業計画」や「内容の概略」については付二と付三を、年度末「無記名式アンケート」の分析結果については付四を、それぞれ参照ください。

三、授業の反省点と改善への提案

(1) 現状 私の担当している「道徳科学2」の授業の学生登録者は、六一名です。当初一名が授業を放棄し、その他三名が二学期初めから授業を放棄しております。また毎週月曜日IV限目(一四時五〇分—一六時二〇分)の授業には、この人たちを含めて毎回平均約一〇名前後の欠席者がいます。その上、毎回のように入学冒頭には教組の私語に対して注意をしなければ始まりません。そのほかに、居眠りや精神的欠席者と思われる学生も数名、毎回のようになっているのが現状です。授業に出てくるのを楽しみにしている学生も勿論いますが……。

(2) 学生の受け身的態度をどうやって改善するか

これらは教える側の至らなさに大半の原因があると反省させられますが、他方、九〇名規模の大教室に名目六〇名余、実質五〇名を入れるクラス編成上の稚拙さも考えられます。人間の生き方に反省を求めるような密度の濃い内容の授業には、教師自らの姿勢が問われるのは当然ではありますが、大きな価値観転換のせめぎあいの渦中で苦闘する教師と学生、学生相互のかわりへの配慮としても、教師の力量に応じたクラス規模はもとより、教室など物理的条件の整備などは、ぜひとも改善しなければならぬ点ではないかと考えます。

他方、受験生募集の段階でこのような「品性教育」にかかわる授業が必修科目として義務付けられていることを全く知らされないまま入学した学生がほとんどであること(本年度は約九六%)も、基本的に大きな問題ではないかと思えます。また、合格者選抜が学力偏差値偏重の点も、建学の精神に反するとは言えないか。この点についても、全学レベルでぜひとも再点検

すべき課題ではないかと考えます。入り口と出口そしてその中間の教育システムの全体を通して、麗澤大学のように強い独自性をもった大学はその存在理由とその裏付けによる真価が問われるのではないのでしょうか。

また、とかく「お山の大将」になりがちな我々教師が、相互に問題点を出し合い、批判・助言しあえるような現行「懇談会」のさらなる充実やそれを支え得る「専任体制」の確立も、当然必要となりましょう。さらには、我々の大学教育全体の総合的な自己評価に基づく、関連する多面的・総合的な改善もまた、同時に進められるべきものと思えます。

(3) その他の改善すべき点についての具体的な提案
①「道徳科学」のクラス規模を原則三〇名程度にとどめる、②可能な限り多様な授業内容・方法のメニューを用意し、学生の履修の選択の幅を拡げる、③ま

たそれと関連して、履修期間を第一学年時のみに限定せず第二学年時も履修可能とする、④学生の意識やレヴェルを充分配慮した設問の出し方や問題の提起をするよう工夫し、その改善に努める、⑤学生からの率直な批判を教師の反省材料としても心から歓迎する（そのためにも感想などの「カード」記入を原則無記名式とする、また合同のカリキュラム検討の場も将来新設する）、⑥担当者以外の教師からの批判・助言も心から歓迎する（そのためには無記名式アンケートや何らかの情報交換の場を積極的に設ける）、⑦「他者を評価することを通じて自らを反省・評価できるようなシステム」の構築を真に創意工夫して生み出すことなどが、その他の改善すべき要点ないしは重点施策として、早急に検討されなければならないものと考えます。

以上

付一、「道徳科学とは何ですか？」——インターネットからの問いに答える（案）

一、道徳科学には2つの意味があります。

一つは、一般名詞としての「道徳科学」であり、他の一つは、固有名詞としての「道徳科学（モラロジー）」であります。

（1）一般名詞としての「道徳科学」

これは、人類学、社会学、心理学、精神医学など人間に関する諸学問における、特に「道徳的事実・現象」についての経験科学的諸研究の総称」を意味します。

（2）固有名詞としての「道徳科学（モラロジー）」

これは、一九二六年日本において、廣池千九郎によって創設されたモラロジーの日本語訳であります。この「道徳科学（モラロジー）」は、時代差を考慮すれば、次のように読み替えることができます。即ち、「道徳科学（モラロジー）」とは、「自他の品性形成を通じて、人類（人生）の危機・困難（争い・挫折など）を根本的に打開し、地球共同体としての恒久的な平和の理想実現をめざす、総合的な、教育人間学」である、と……。

（3）「道徳科学」と「道徳科学（モラロジー）」の関係

後者の実現をめざしながらも、この両者は、本来相互補完的な関係にあるべきものとしてとらえることが出来ます。つまり、後者は前者にその「理念や存在意味を与え、さらにそれらを総合することをめざす特別の位置に立つもの」として、また、前者は後者を「経験科学的に基礎付け得るもの一般」として、互いに相互補完的な関係においてとらえることが出来ます。

二、「道徳科学（モラロジー）」における「道徳」、「品性」、「人格」

（1）「道徳」、「品性」、「人格」の教育人間学的意味

「道徳科学（モラロジー）」においては、「道徳」とは、広く「人類の品性形成にかかわるすべての事実・現象」を意味します。

また、「品性」とは、「人間の態度・判断・行動の基礎・根源をなす精神的傾向性」と仮定します。この「品性」によって人間の諸能力（学力、知力、金力、権力、体力、など）が使われる際、その全体的なありようを「人格」と考えます。

（2）「最高道徳」と「最高品性」、その実現の動態的過程

「道徳科学（モラロジー）」の中心をなす「最高道徳」は、「最高品性完成の実践的方法」と位置付けられます。即ちそれは「人類全体の安心・平和・幸福の実現を祈り、少しでも貢献しようと努力する自他の最高品性形成にかかわるすべての心遣いと行為」をさします。つまり「最高道徳」は、「三方よし」即ち、全てのいのちを活かそうとする「麗澤の心」（麗澤大学創立の基本精神）「最高品性」の源泉とも言えるでしょう。

しかしその実現過程は決して生易しいものではありません。依存と独立、利己心と利他心、信念と独善、長所と短所、理想と現実、苦しみと救いなどさまざまな根源的な逆説（パラドックス）や葛藤やジグザグ経験を経ながら、光り輝くような「最高品性」へとその形成は徐々になされていくと見るのが、穏当なとらえ方ではないでしょうか。

題 目 品性形成の人間学―現代の危機的状況と品性形成の課題について考える、人間存在のかかえるパラ
ドックス（逆説性）の視点から―

授業内容 人類史的な危機的状況、一大転換期の中における私たちの直面する基本課題を「品性形成人間学」
の立場、特に人間存在のかかえる根源的な「パラドックス（逆説性）」の視点から、具体例をあげながらできる
だけ身近な問題としてとり上げる。

即ち、人間は、〈生と死〉〈光と闇〉〈秩序と混沌〉〈競争と共生〉〈長所と短所〉など、いかにパラドックス（逆
説性）・矛盾に満ちた存在か、という問いを中心に据え、宇宙論的、生命史的・人類史のおよび生涯史的な「品
性形成人間学」の立場から、危機的な状況の中で「私たちは今何をなすべきか」を探究し、人類の精神革命の
必要性、特に私たちの「自己の品性形成の課題」について考える。

本音を語り合う機会の比較的乏しいひとたちにその機会をつくるきっかけとなり、授業にでてくるのが楽し
みになるよう、可能な限り豊富な視聴覚教材を採り入れる。また一方通行的な講義だけの授業にならないよ
う、「意見・感想カード」の毎回提出の他、小グループ討議・全体討議なども織り込み、相互啓発的な雰囲気
の活気ある授業をめざすなど、授業の運営や内容に創意工夫と改善を図っていききたい。

授業内容の目次 1.オリエンテーション／2.現代の危機的状況―地球環境と人間性の破壊を中心に／3.
人間らしさ（人間性）の基本構造／4.人間形成の基本課題―特に青年期と育児期を中心に／5.むすび―地球社
会の理想と至福に至る道

授業計画 最初、約五回のオリエンテーションで、道徳科学やモラロジーとは何かにふれるほか授業の運営法や研究計画の立て方や成績評価法などについて解説する。

授業は、講義と質疑・応答を中心とし、上記講義内容の第二～四章に各約五～六回程度、終章に約二回、合計二四回程度の授業回数を配分し、授業日程を進める。

授業の最終部では、学生のレポートの発表とそれに基づく質疑・討論会を行う。

なお、レポートについて指導・助言を受けた人は、期日までに「研究計画書」を提出する。その提出された「研究計画書」に基づき、指導・助言する。

評価法 下記の二つの、総合による。従って、欠席の多い人や当番・提出物・その他約束を守ることの出来ない人は、失格となります。

平素の活動（質疑・応答、カードや宿題の提出、グループの世話、当番発表や意見発表と討論、など）

レポートとその発表もしくは質疑・討論

..... 五〇％
..... 五〇％

教材 プリント教材（講義要旨、参考資料、ほか）、 videotape 教材、学生の「意見・感想カード」、廣池千九郎博士記念館見学、その他学生からの意見・提案を活かした方法による予定。

付三、一九九六年度道徳科学Ⅱ 授業総まとめ—各章のねらいを中心に

「品性を育てる人間学—現代の危機的状况におけるその課題について考える、人間存在のパラドックスを中心に」

第一章 オリエンテーション

第一章のねらい

- (1) 授業の狙い・進め方など授業全体の概略見通しにより、理解を助ける。
 - (2) 不要な先入観や偏見を排し、麗沢の精神を学ぶ態度の自己形成に資する。
 - (3) 参考資料・文献などをできるだけ予め提示し「自学自習」の便を図る。
- また、レポートや宿題作成が、少しでも効果的にできるよう、配慮する。

第二章 現代の危機的状况—地球環境と人間性の破壊を中心に

第二章のねらい

- (1) 地球環境の破壊も家庭環境の破壊も原因の根は一つではないかについて考える。
- (2) それら根本原因と人類思想の根幹に於ける人間の独善性との深い関わりをみる。
- (3) 現状の危機を打開するために我々に出来ることは何かについて一つ一つ考える。

第三章 人間性（人間らしさ）の基本構造

第三章のねらい

- (1) 人間存在の根源的な特質を、総合的・全体的に考える手がかりをつかむ。
- (2) 人類の直面する危機打開の道探究への示唆を、数々の危機を乗り越えてきた生命や人類の歴史におけるその「滅亡と発展の岐路を決定付けたものは何か」に求める。
- (3) 現状の危機を打開するために我々に来ることは何か、について考える。

第四章 人間形成の基本課題——特に青年期と育児期を中心に

第三章のねらい

- (1) 生涯における人間形成の基本課題について、特に青年期と育児期を中心に考える。
- (2) 生命誕生の宇宙論的な神秘を通して「育てること」の基本的な要諦を学ぶ。
- (3) 「ピンチこそチャンス」など、人生のパラドックスについての洞察力を培う。

第五章 むすび——地球社会の理想と至福（最高の喜び）に至る道

第三章のねらい

- (1) 一年間の授業を総括し、地球人類社会の進むべき方向・理想について考える。
- (2) 学生の代表的なレポートの発表会を通して、一年間の成果を味わう。
- (3) アンケートを通して、授業内容・方法などについての改善すべき点を考える。

付四、「〔無記名式アンケート〕道徳科学12の授業を振り返って」

一九九四年七月一八日実施分（この年は二年次生履修、第一学期完結）と

一九九七年一月二〇日実施分（この年は一年次生履修、通年で完結）の比較

問1. あなたは麗澤大学に入学する以前に「道徳科学」ないしは「モラロジー」についてどの程度知っていましたか。

| | 肯定的 | 態度保留 | 否定的 | 無答 | 回答合計 |
|--------|---------|--------|----------|----|-----------|
| 一九九四年度 | 一四・〇（六） | — | 八六・〇（三七） | — | 一〇〇%（四三名） |
| 一九九六年度 | 二・〇（一） | 二・〇（一） | 九六・一（四九） | — | 一〇〇%（五一名） |

〔注〕右記「肯定的」には「大変よく」「かなり」「少しは」を含む。「態度保留」には「どちらともいえない」を、「否定的」には「あまり」「全く」を含む。また、最初の数字は%を、（ ）内の数字は回答人数の実数を示す。履修登録者は、一九九四年度全五四名、一九九六年度全六一名。

問2. この授業にたいする現在の率直な全体的印象は、次のうちのどれですか。

| | 肯定的 | 態度保留 | 否定的 | 無答 | 回答合計 |
|--------|----------|----------|----------|--------|-----------|
| 一九九四年度 | 七四・四（三二） | 一六・三（七） | 七・〇（三） | 二・三（一） | 一〇〇%（四三名） |
| 一九九六年度 | 一九・六（一〇） | 四九・〇（二五） | 二九・四（一五） | 二・〇（一） | 一〇〇%（五一名） |

〔注〕右記「肯定的」には「大変満足」と「かなり満足」を含む。「態度保留」には「どちらともいえない」を、「否定的」には「あまり満足でない」と「全く不満」を含む（以下全て同じ）。

問3. 各設問について、それぞれの選択肢の中から一つだけ選んで下さい。

(1) 授業の内容について、満足していますか

| | 肯定的 | 態度保留 | 否定的 | 無答 | 回答合計 |
|--------|----------|----------|----------|--------|-----------|
| 一九九四年度 | 七六・八(三三) | 一一・六(五) | 九・三(四) | 二・三(一) | 一〇〇%(四三名) |
| 一九九六年度 | 三一・四(二六) | 四五・一(二三) | 二三・五(二二) | — | 一〇〇%(五一名) |

(2) 授業の進め方について、満足していますか

| | 肯定的 | 態度保留 | 否定的 | 無答 | 回答合計 |
|--------|----------|----------|----------|----|-----------|
| 一九九四年度 | 三九・五(二七) | 四一・九(二八) | 一八・六(八) | — | 一〇〇%(四三名) |
| 一九九六年度 | 一七・六(九) | 五一・〇(二六) | 三一・四(二六) | — | 一〇〇%(五一名) |

(3) この授業で学んだことは、現在の生活や将来の生活に役立つと思いますか

| | 肯定的 | 態度保留 | 否定的 | 無答 | 回答合計 |
|--------|----------|----------|---------|--------|-----------|
| 一九九四年度 | 七六・七(三三) | 一六・三(七) | 四・七(二) | 二・三(一) | 一〇〇%(四三名) |
| 一九九六年度 | 四七・一(二四) | 三九・二(二〇) | 一三・七(七) | — | 一〇〇%(五一名) |

(4) この授業が「必修科目」であることについて、私学の建学精神の表現として当然と思いますか

| | 肯定的 | 態度保留 | 否定的 | 無答 | 回答合計 |
|--------|---------|----------|----------|----|-----------|
| 一九九四年度 | — | — | — | — | — (設問無し) |
| 一九九六年度 | 一五・七(八) | 四九・〇(二五) | 三五・三(二八) | — | 一〇〇%(五一名) |

(5) 今後機会があれば、道徳科学やモラロジーないし廣池千九郎に関して、さらに学びたいと思いますか

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度

—

—

—

—

— (設問無し)

一九九六年度

一一・八(六) 二七・五(二四) 六〇・八(三一)

—

一〇〇%(五一名)

問4. 最後に、この授業についてあなたの総合的な評価は次のうちのどれですか。各評価段階を表す記号をそれぞれ一つずつ率直に運んで、○印をつけてください。

(1) 意味があると思いましたが

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度

三四・九(二五)

五一・二(三二)

一四・〇(六)

—

一〇〇%(四三名)

一九九六年度

四五・一(二三)

四五・一(三三)

九・八(五)

—

一〇〇%(五一名)

(2) 現実的であると思いましたが

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度

六九・八(三〇)

二三・三(二〇)

七・〇(三)

—

一〇〇%(四三名)

一九九六年度

四九・〇(二五)

二九・四(二五)

二一・六(一一)

—

一〇〇%(五一名)

(3) 学問的であると思いましたが

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度

三七・二(一六)

四六・五(二〇)

一四・〇(六)

二・三(一)

一〇〇%(四三名)

一九九六年度

三三・三(一七)

二九・四(二五)

三七・三(一九)

—

一〇〇%(五一名)

(4) やさしいと思いましたが

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度 三〇・二 (二三)

五八・一 (二五)

一一・六 (五)

—

一〇〇% (四三名)

一九九六年度 九・八 (五)

三三・三 (二七)

五六・九 (二九)

—

一〇〇% (五一名)

(5) 面白いと思いましたが

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度 六九・八 (三〇)

一八・六 (八)

一一・六 (五)

—

一〇〇% (四三名)

一九九六年度 二五・五 (二三)

三三・三 (二七)

四一・二 (二二)

—

一〇〇% (五一名)

(6) 開かれた教育態度であったと思いましたが

肯定的

態度保留

否定的

無答

回答合計

一九九四年度 五一・二 (二三)

四四・二 (一九)

四・七 (二)

—

一〇〇% (四三名)

一九九六年度 一三・七 (七)

四三・一 (二二)

四一・二 (二二)

二・〇 (一)

一〇〇% (五一名)

(注) なお、「要望・提言など自由記入欄」の分析については、省略致します。

以上

編集後記

『麗澤教育』第三号の特集は「女子学生への提言」を試みました。このテーマに四名の先生が寄稿していただいたことに感謝します。ことさら女子学生への提言をテーマにした理由を一言述べたいと思います。麗澤大学には男子学生よりも多数の女子学生が在籍しています。しかし先生方といえば、圧倒的に男性教員ですので、先生のなかには、就職指導や生活指導、はては専門的指導においても、女子学生の希望にはたして本当に沿っているのかどうか、先生方の指導や提言が実情に合っているのかどうか、適切なものかどうか、反省が必要なのではとの意見が耳に入ることがあります。男性と女性とことさらに区別は必要はないとの意見もあり、また反対に格別な配慮が求められるとの意見もあります。

そこで、そもそも従来は全く無視されてきた、現代大学教育における性差の問題をいま一度議論しておくことは決して無駄ではないと考えたからです。そしてもう少し、女性教員の意見に耳を傾けて、果たして自己の日頃の指導が適切なものかどうかを見直してみてもどうか、こんなふうに考えたのです。

もちろん反対意見も多いことでしょう。いまさら性差など問題ではない、専門教育には関係のないことだとか、区別を問題視することこそ差別になるとか、多彩な見解がみられることでしょう。しかしもし、本誌に投稿された論説が活発な意見を引き出す引き金になるなら、それは願ってもないことであるといいたいのです。

筆者は今後、建学の理念の内容や課外活動全体において、このような議論が一層活発になることを切望しています。

そもそも本誌のタイトルにある「麗澤教育」とは、最も広義には、麗澤大学におけるすべての教育を意味するものですが、ことに「人間教育」あるいは「人格教育」、「国際平和」・「国際理解教育」、「自然尊重の教育」、そして道徳と経済が車の両輪のように一体となって展開される「道経一体の教育」等の内容を包括するものといえるでしょう。

それらの内容は、専門の授業に依存するのみならず、実はその具体的な成果は、課外活動によってはじめて得られるのではないかと考えることができます。筆者はかつて、そのことを学生部長を拝命したときも痛感しましたが、本誌に寄稿された顧問・コーチおよび学生諸君の記事からも確認できるのです。

人が人にぶつかって苦悩し成長を遂げる機会は、課外活動にこそ多々みられます。筆者は大勢のゼミ学生を抱えてはいますが、その専門指導にはおのずから限界があるのです。それは私の教員としての限界だといわれれば仕方のないことですが、真の人間教育は、日々の生活を通じて実践され、実践を通じてはじめて具体的な課題意識をもつことができるといえましょう。

そして大学内で、その要請に応えることができる場合は寮教育を除くと、課外活動・課外教育しかないと考えています。しかし、麗澤大学には、その大切な課外活動を支援する熱気とか雰営の柱に課外活動のことが十分に意識されてはいないような気がします。

本誌を通じて課外活動に向けられた学生諸君の熱い情熱や、多忙な時間を割いて、課外活動に献身的に援助を惜しまない学生部および顧問・コーチの諸先生方の表面には出ない日頃の努力を評価し、今後の大学運営の基本に活用していただきたいと思います。切望します。

(編集責任者・水野治太郎)

編集 『麗澤教育』編集委員会

発行 麗澤大学

〒二七七

千葉県柏市光ヶ丘一ノ一

電話 〇四七二一七三―三三七〇〇

印刷所 昌美印刷株式会社

東京都足立区綾瀬二ノ二六ノ七

電話 〇三―三六九〇―三二九六

一九九七年四月三日 発行